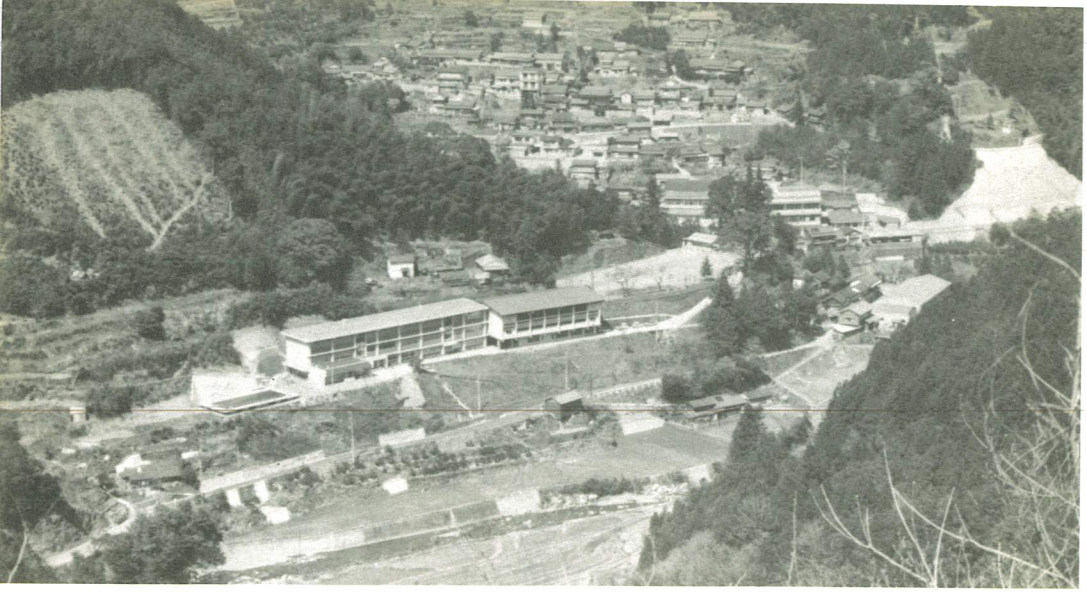
土佐山のくらし



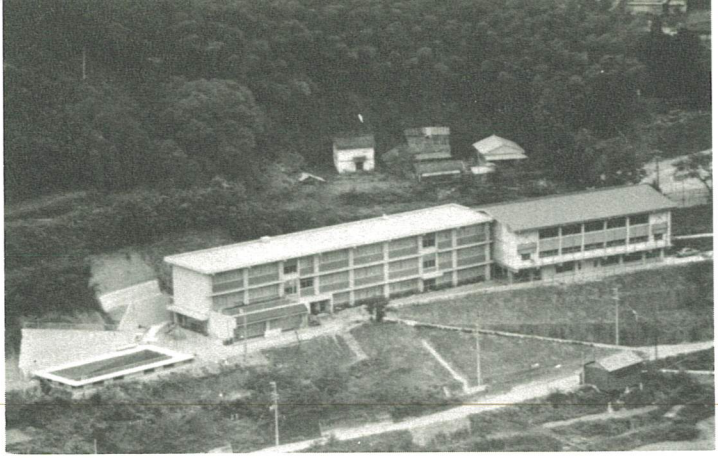
空から見た土佐山村（役場ふきん）

一　わたしたちの土佐山村

わたしたちのすんでいる土佐山村はどんなところにあるのでしょう。

はじめに学校のまわりをしらべ、つぎに村全体のようすをしらべてみましょう。高いところにのぼって、校くをながめたり、絵地図をつくったりして山や川、田やはたけのようすをしらべてみましょう。そして、土地のようすと人々のくらしのつながりについて考えてみることにしましょう。

(一) 校くのようす



土佐山小学校

校くは、菖蒲・西川・梶谷・日の浦・土佐山（長谷）・都積平石・高川・桑尾・網川・弘瀬・久万川・中切・東川の一四部らくからできています。むかしは、西川校く・桑尾校く・弘瀬校く・中切校くにわかれていましたが、昭和四一年、中切小学校と弘瀬小学校がとう合し、土佐山西小学校ができました。また、昭和五〇年、西川小学校と桑尾小学校がとう合し、土佐山東小学校ができました。昭和五四年、土佐山東小学校と土佐山西小学校がとう合し、今の

土佐山小学校ができました。

こうして、わたしたちの村は、小学校が一校になりました。

今、菖蒲・西川・梶谷の一部（川戸）・弘瀬・網川・久万川・中切・東川の友だちは、スクールバスで登下校しています。

家の数は、およそ四〇〇戸で、一四〇〇人ぐらいの人々がすんでいます。

校くの中央を東西に鏡川が流れ、その支流である西川川・高川川・長谷川・東川川・弘瀬川が南北に流れています。

スクールバス

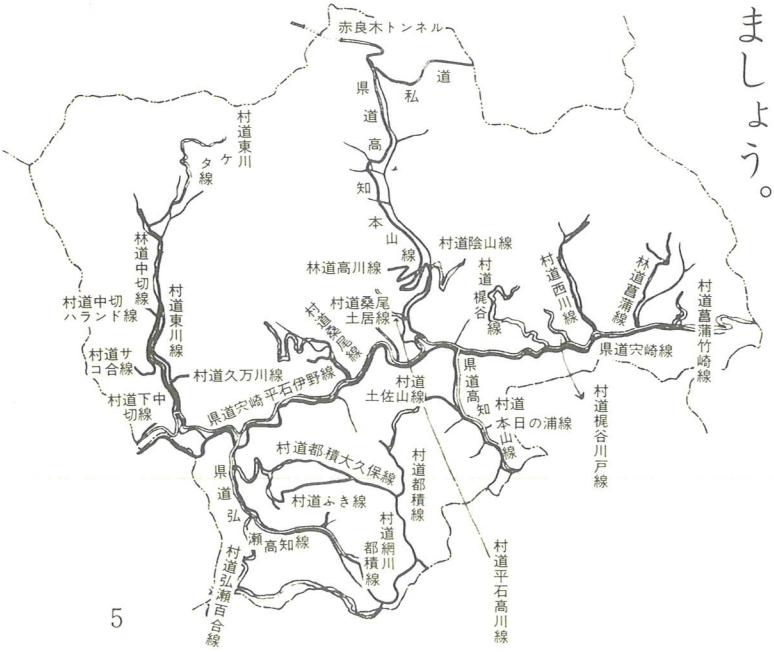
校くの道は、その川にそってつくられ、県道伊野(いの)―宍崎(ししざき)線、高知―本山(もとやま)線がおもなものです。校くについてくわしくしらべてみましょう。

土佐山小学校くの世帯数(せたいすう)と人口(じんこう)

(昭和57年4月1日現在)

地く	世帯数	男	女	計
菖蒲	38	79	83	162
西川	16	36	36	72
梶谷	20	45	35	80
日の浦	11	15	19	34
土佐山(長谷)	18	26	25	51
平石	41	47	58	105
高川	46	70	80	150
桑尾	43	62	60	122
都積	12	22	21	43
網川	7	16	15	31
弘瀬	64	118	112	230
久万川	18	35	43	78
東川	22	34	36	70
中切	36	64	62	126
計	392	669	685	1,354

土佐山村の道



菖蒲洞

1　土佐山村の東部

校くの東にある菖蒲・西川部らくは、鏡川の上流にあって、山をこえると南国市になります。昭和二三年までは、バスもなく高知市へ出るのに歩いて三時間もかかりました。

バスのしゅう点近くには、龍河洞のように石かいがんでできている、菖蒲洞があります。ここから、大むかしの人がつかっていた土きも、みつかっています。

昭和二四年には、高知県天然記念物に指定されました。

西川部らくには、西川川が流れています。この川には、あめごやますの子がはなされています。西川川が鏡川に流れこむところに西川小学校がありました。今、そこには、りっぱな村の体育館ができています。

工事のすすめられている梶谷線

梶谷部らくの山の上の家には、車のはいる道がありません。そこで、昭和四七年から、新しい道をつける工事が始まりました。

2　土佐山村の中央部

平石部らくは、村役場・ゆうびん局・しんりょうしょ・農業きょう同組合・ちゅうざいしょ・消ぼうとんしょなどがあって、村の中

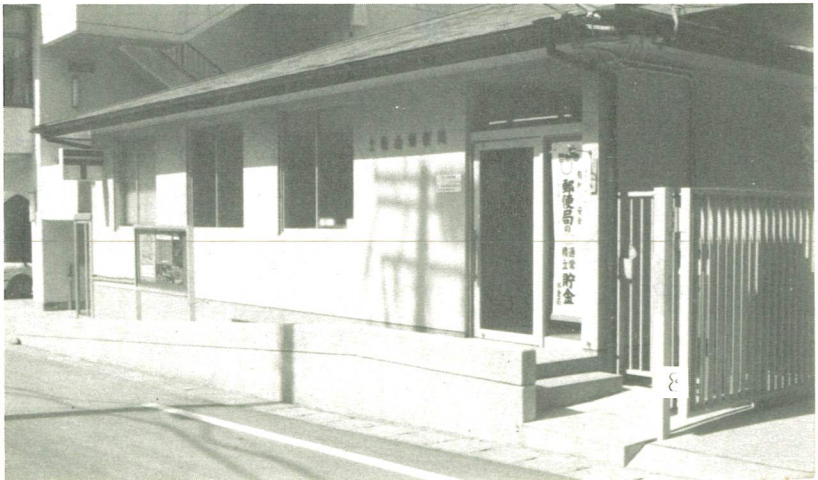
土佐山村役場

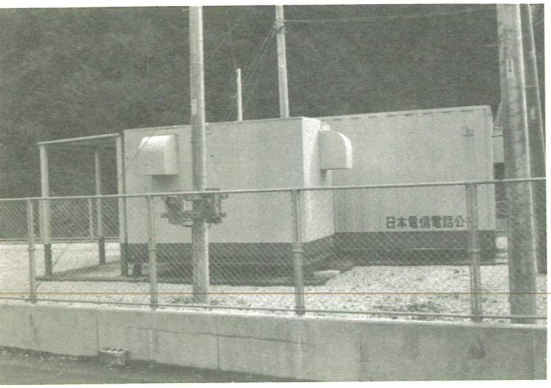
心地です。教員じゅうたくや、かんい水道のせつびもととのっています。

ここにバスがかよいはじめたのは、西まわりが大正一五年、東まわりが昭和三一年です。今は、おうふく七回もあるので、村で一番べんりなところです。

このように交通がよくなると、二つあったやど屋もはんじょうしなくなりました。また、ここにあったかじ屋も、

土佐山ゆうびん局





鏡電話交かん局土佐山分局（桑尾）

土佐山村農きょう

なくなってしまいました。

昭和四六年に、有線放送が農しゅう電話にかわり、平石地いきしゅうだん電話交かんしょができました。その後、昭和五五年一二月、自動電話にかわりいっそうべんりになりました。

工石山の登り口にある高川部らくは、バスのしゅう点になっています。ここには、かんづめ工場があって、春には、たけのこやふきのかんづめを作る人が、たくさんはたらいています。

さんごの化石の加工品

都積部らくは、ゆず・みょうが・たけのこなどがたくさんとれます。

この部らくには、大理石でかびんをつくる作業場がありました。また、このあたりでとれたさんごの化石で、ネクタイピンや、ペンダントなどをつくる工場が、高知市にあります。この工場へ仕事に行っている人もいます。

日の浦部らくでは、日本セメントの会社が石かい石をほる計画をたてているそうです。

3　土佐山村の西部

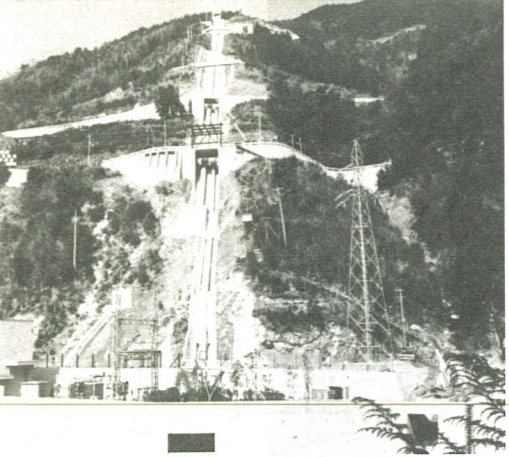
弘瀬部らくには、中学校や消ぼうの西分だ

土佐山中学校ふきん（弘瀬）

んとんしょなどがあり、かんい水道のせつびも一部できています。中学校のすぐ上には、秋のおまつりで有名な、仁井田じん社があります。

工石山から流れる東川川の谷あいに、東川・中切・久万川の部らくがあります。人々は、日当たりのよいところをえらんで家をたてています。その中心に中切小学校がありました。今は、たて物だけがのこっています。

久万川部らくには、昭和五〇年ごろまで手すきでしょうじ紙を作っている家がありました。



高知分水・天神発電所

谷あいの部らく（東川）

東川部らくには、昭和五三年三月に高知分水工事で完成した地蔵寺川導水路という長さ九四二六メートルのトンネルがあります。このトンネルは、地蔵寺川の水を鏡川へ流すための水路です。おくられてきた水は、下中切の水そうにためられ、そこから大きな鉄のパイプで、天神発電所へ落としています。

この発電所の出力は、やく一二〇〇〇キロワットです。

トンネルの開通によって、高知市へたくさんの水がおくられるようになりました。

〈絵地図づくり〉

◎絵地図づくりのじゅんじょ

①紙の上を北にして、学校を中心にかく。
②おもな道路・川などをかく。
③目じるしになるたて物をかく。
④家の多いところをかく。
⑤田畑の多いところをかく。
⑥道路のしせつやくらしに役だつもの。
　などもかく。
⑦色分けしてぬる。

○おもな記号と色

学校　文　家の多いところ
神社　⛩　山
橋　
田　
畑　

○しらべられなかったり、はっきりしなかったところ―しゃしんや、去年の三年生のつくった絵地図とくらべる。

の　絵　地　図

○気づいたこと

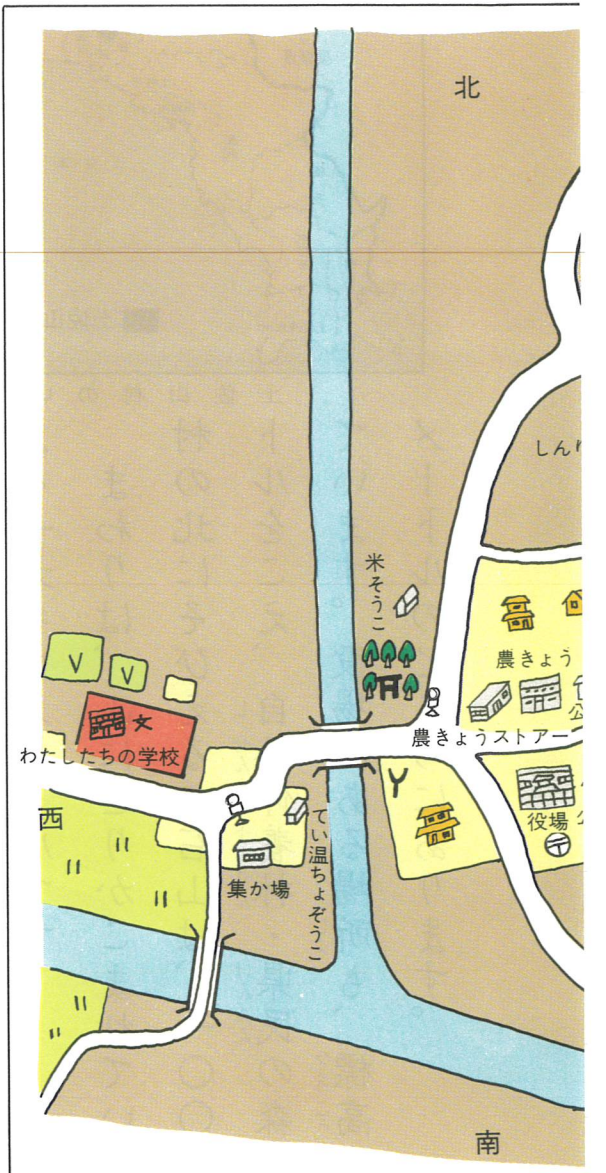
東

○気づいたこと

南

※学習をふりかえって

平石ふきん



○気づいたこと

北

○気づいたこと

西

まとめ

橋　ゆうびん局　学校

神社　ちゅうざいしょ（はしゅつ所）　消ぼうとんしょ（消ぼうしょ）

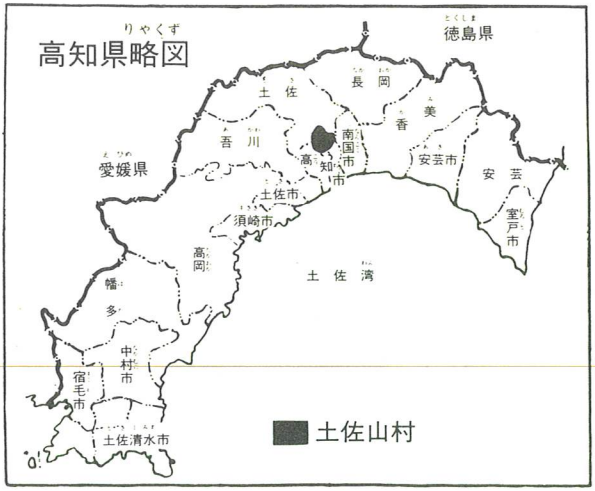
しんりょうしょ（病院）

(二) 村のようす

1 山にかこまれた土佐山村

わたしたちのすんでいる土佐山村は、高知県のほぼ中央・高知市のすぐ北にあります。高知市から村の中心の平石までの道のりは、東まわりでおよそ一六キロメートルです。

まわりは、山にとりかこまれています。村の北にそびえる工石山は、一〇〇〇メートルをこえ、自然休養林・県民の森となっています。役場のある場所も、標高一四五メートルのところにあります。



土佐山村のいち

人々は、鏡川やその支流の川にそって家をつくり、おもに農業によって生活してきました。

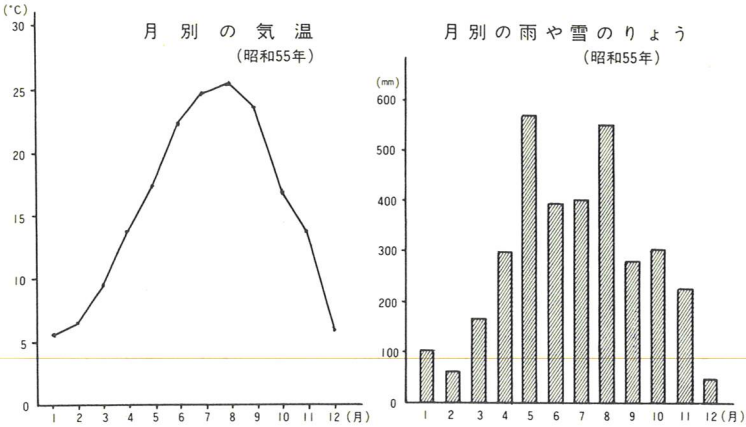
山の間を流れる川の両ぎしに、せまい田や畑がだんだんになって、かなり高いところまで開けています。

水田がすくないので、農家の人々は、むかしはおもに畑や山のしごとで、くらしをたてていました。紙すき・すみやき・ようさんがさかんでした。山をきりひらいて、和紙の原料になるみつまた・こうぞ、かいこのえさになるくわなどがつくられていました。すみをやいた

紙すき（久万川）

あとには、植林がすすめられました。

しかし、その後和紙や木たんがあまりつかわれなくなったことや、ねだんがさがったため、なかには、しごとをかえたり、都会にしごとをもとめて、出ていったりする人が、たくさんふえてきました。



気温・雨量（土佐山村）

2　雨の多い土佐山村

鏡川の上流地いきにある土佐山村は、雨の多いところで、一年間の雨量が、五〇〇〇ミリメートルをこえる年もあります。高知県は、夏から秋にかけて台風の通り道になることが多く、そのため、土佐山村も、

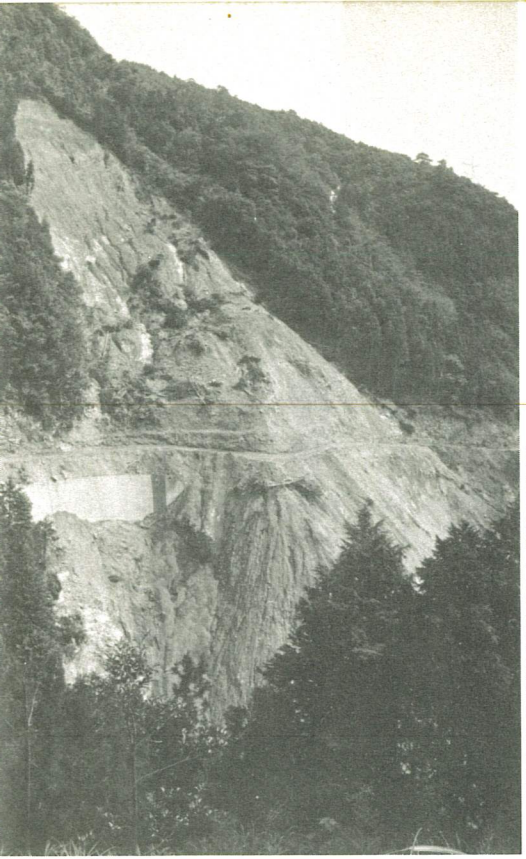
むかしからたびたび台風のひ害をうけました。

とくに、昭和五一年の台風一七号は、いままでにないといわれる大きなひ害をあたえました。大雨がふり、山津波がおこり、いたるところに山くずれがありました。道路はずたずたに切れました。土佐山中学校（当時土佐山西小学校）もどろ水につかりました。降水量は、一日に七三〇ミリメートル、一時間の最大の雨量は、一一五ミリメートル、四日間の総雨量は、一八五二ミリメートルにもたっしました。

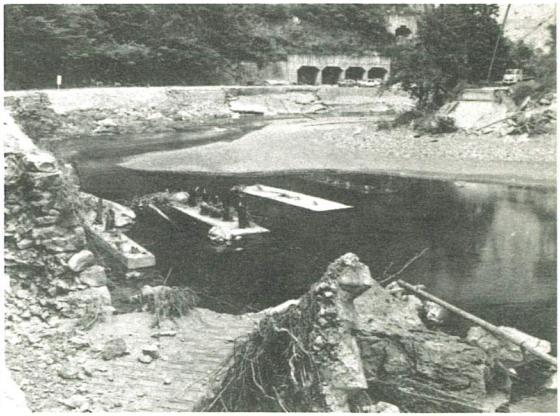
降水量（ミリメートル）

高知気象台しらべ

昭和年	土佐山村	高知市
45	3,434	2,590
50	4,014	3,105
51	5,036	3,637
55	3,319	2,838



梶谷ふきん



弘瀬ふきん

1976年（昭和51年）の台風17号のとき、9月8日から降り続いた雨は、平石で12日の午後5時から6時の1時間に115ミリを最高に、5日間で1852ミリを記録。集中ごう雨は村内いたる所に大災害をもたらした。

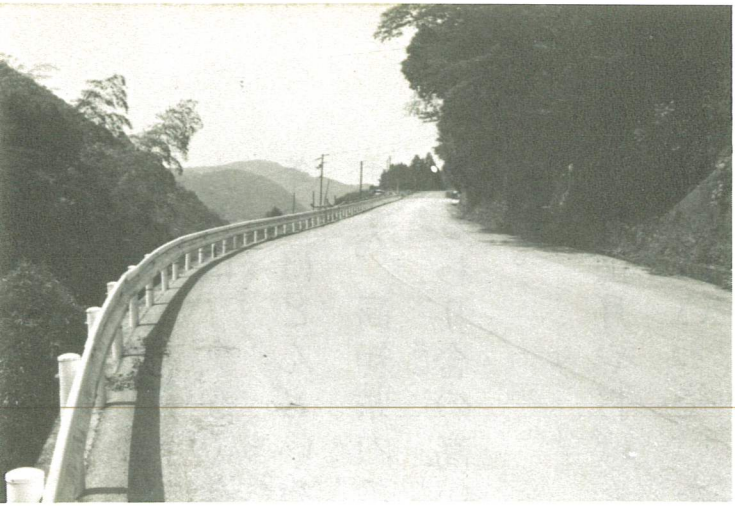
ひ害のじょうきょうは、家屋の全かい5棟、半かい6棟、床上、床下しん水16棟など。ひ害そうがくは、30億円をこえたといわれています。

3　人のへった土佐山村

わたしたちの村は、昭和三五年ごろまでおもに山や畑のしごとをして、くらしをたてていました。

そのころ、町や都市では、広い道路や新かん線ができ、大きな工場やたくさんのじゅうたくなどが、たてられるようになりました。

わたしたちの村の中学校・高等学校のそつぎょう生や働きざかりの男の人たちは、町や都市へしゅうしょくしたり、出かせぎに行きました。



ながい坂の高川地く

そのため、土佐山村で働く人たちは、少なくなり今では、青年のほとんどいない地くもあります。高知県内でも、老人のしめるわり合の高い村になっています。

お正月やおぼんには、よそへ働きにいっていた人たちが、帰ってきて、各地くは、きゅうにぎわいます。

人口のへった土佐山村

（土佐山村役場しらべ）

年次	人口	児童数	生徒数
1950（昭25）	2,601	319	165
1955（昭30）	2,508	347	167
1960（昭35）	2,508	337	153
1965（昭40）	2,060	238	138
1970（昭45）	1,734	159	109
1975（昭50）	1,533	82	71
1980（昭55）	1,389	80	34

面積　59.41 Km²　　人口　男　669人

世帯数　392戸　　女　685人

計　1,354人

（昭和57年4月1日現在）

二、村民のしごととくらし

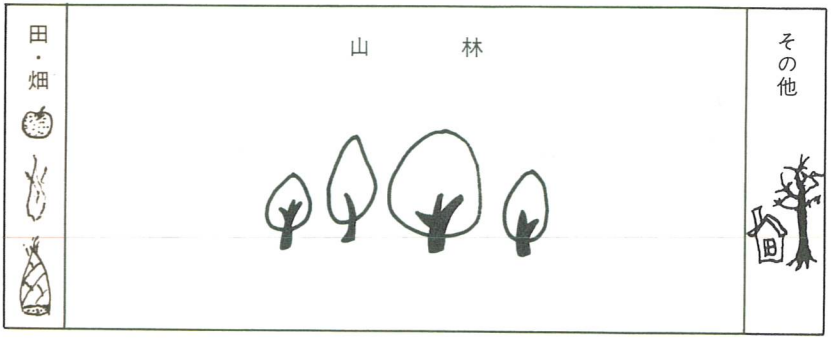
(一) しごととくらし

わたしたちの村は、山が多く、せまい田や畑がちらばっているので、農業をするのには、たいへんくろうします。

このせまい土地からたくさんの農作物をとるために、作り方の研究もねっ心にすすめています。

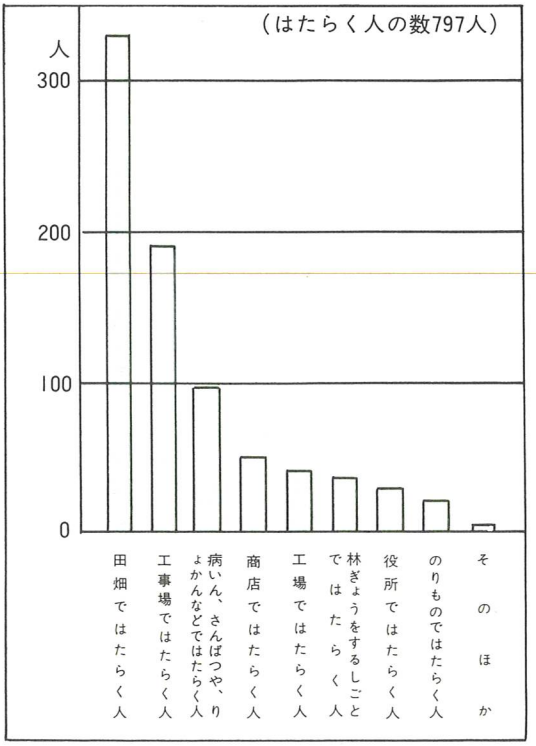
せまい田や畑（菖蒲）

土地利用のようす



むかしは、家の人みんなで、田や畑のしごとをして、村内で生活していました。

土佐山村のしごとしらべ
（昭和55年国せいちょうさ）



近ごろでは、道路がよくなり、車がふえてきたので、高知市など村外へ出かけて、はたらく人がとても多くなりました。

そのほか、役場・ゆうびん局・農業きょう同組合などにつとめている人もいます。

㈡　農家のしごと

鏡川や谷川にそったわずかな田では、米を作っています。しかし、さいきんでは、米を作る農家もしだいに少なくなってきました。

畑では、ゆず、みょうが、しょうがなどが作られています。

山林には、すぎ・ひのきなどの植林がおこなわれています。

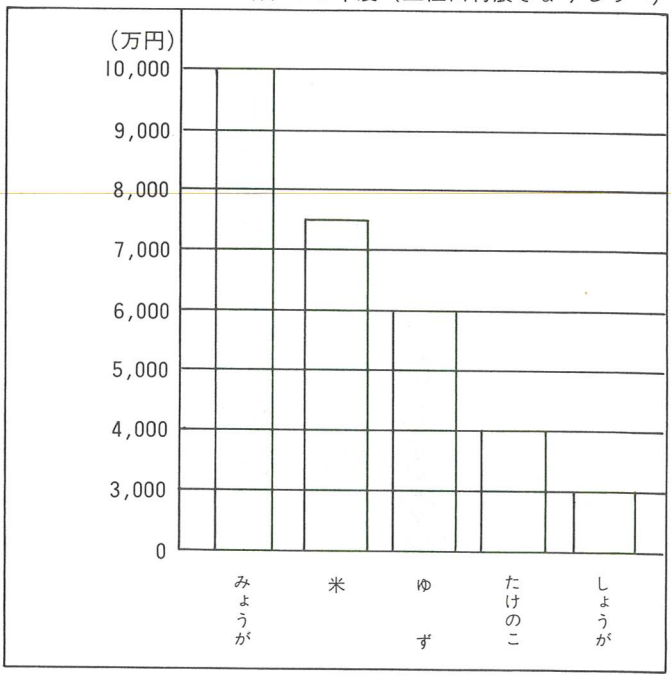
また、たけのこ作りも村のたいせつなしゅう入のひとつとなっています。

農地の利用

米	たけのこ	ゆず	みょうが	しょうが	その他

農さん物の売り上げ高

昭和５５年度（土佐山村農きょうしらべ）



農さん物の売り上げ高

（単位　百万円）

農さん物 ＼ 年次	みょうが	米	ゆず	たけのこ	しょうが	しいたけ
1965（昭40）	3	13	—	9	5	—
1970（昭45）	17	23	—	19	7	—
1975（昭50）	53	42	37	32	10	—
1980（昭55）	100	75	60	40	30	20

1　みょうが

わたしたちの村では、みょうががたくさんとれます。これは、気温・しつ度・日当り・土などが、みょうがを作るのによくてきしているからです。

みょうが作りは畑の作物の中で、世話の少ない方ですが、それでも草ひきやしきわらなどの仕事があります。

みょうがは、取る時期によって、夏みょうが・秋みょうがのくべつがあります。とくにねだんの高いのは、七月に入ってとれる夏みょうがです。あつ

みょうが畑

い時期なので、いたみやすく、はやくにづくりをしなくてはならないので、とてもいそがしいのです。

秋みょうがは、むかしから作られていましたが、夏みょうがは、昭和四四年ごろから、たくさん作られるようになりました。

村の人たちは、みょうが作りにたいへん力を入れています。昭和五五年の売り上げ高は、一億円にもなりました。

土佐山で作られた、みょうがは、きょう同で、はこづめにして、飛行機で、大阪や東京の方へも送られています。

みょうがの出荷（土佐山農きょう）

2 米

米は、どの農家でも作っています。

米作りは、四月の中ごろからとりかかります。五月になると田植が始まります。そのころになると、よそへはたらきにいっている人たちも、家族やきんじょの人たちといっしょになって田植をします。

いねをよく育てるためにひりょうをやったり、農やくをかけて病気や虫のがいから守ります。

近ごろは、おいしい米を作ることが大

切になってきました。

3　ゆず

ゆずは、むかし、家で少し作られていました。

近ごろ、ゆずの味（あじ）やかおりが人々によろこばれるようになり、昭和四〇年ごろから、都積・高川・東川などで作られるようになりました。

今では、村内のどこの部らくでも作られています。

ゆずは、植えてから実がなるまでに

ゆず園

六年ぐらいかかります。村にてきした作物ですから、ゆず作りに力を入れています。

ゆずは、昭和四六年から東京・大阪などへきょう同で出かされています。

一一月ごろとれたゆずは、そのまま送られるものもありますが、多くは、冬の間、村内ところどころにあるてい温ちょぞう庫でたくわえ、春になって市場へ売り出されています。

ゆずの出荷（土佐山農きょう）

4　たけのこ

村の大切な作物のひとつに、たけの

こがあります。

たけのこは、おもにもうそう竹からとれます。ほとんどの農家は、自然にはえたたけのこをそのまま取り入れていますが、中には、たけやぶへひりょうをあたえたり、土地をたがやしたりして、たけのこの育ちをよくしている農家もあります。

ほってきたたけのこは、なまのままやかんづめにして、高知市や大阪・東京のほうへも送られます。

竹　林・たけのこほり

昭和五五年度のとれ高は、およそ四六万キログラム（農きょうあつかい）で、村の作物の中でも多くのしゅう入をあげています。

これは、わたしたちの村に竹やぶが多く、作る農家も多いからです。

5　その他の産物（さんぶつ）

わたしたちの村は、しょうが作りもさかんなところです。

しょうがは、三月のすえから、四月にかけて植えつけます。夏になると、ひりょうをやったり、しきわらをしいたりし

て、大切に育てます。

一一月になって、しもがおりる前に取り入れが始まります。とったしょうがは、きょう同で横あなをほり、それにたくわえておいて、県外に売り出す方が多いのです。

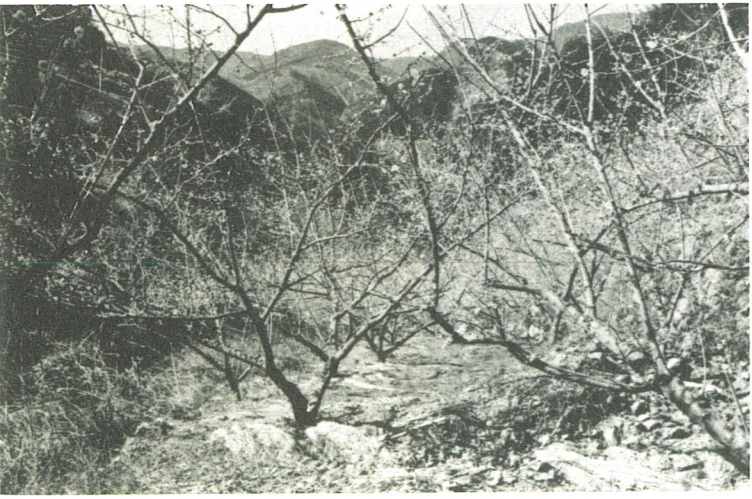
木ざい・うめなどもとれます。

うめは、中切・東川に多く作られています。消どく・根もとうちなどの世話を六年ぐらいすると、よい実がたくさんとれます。

杉・ひのきなどの植林は、まず、地ごしらえをしてからなえを植えつけます。

そして、数年間は、下草かりや枝うちな

梅林

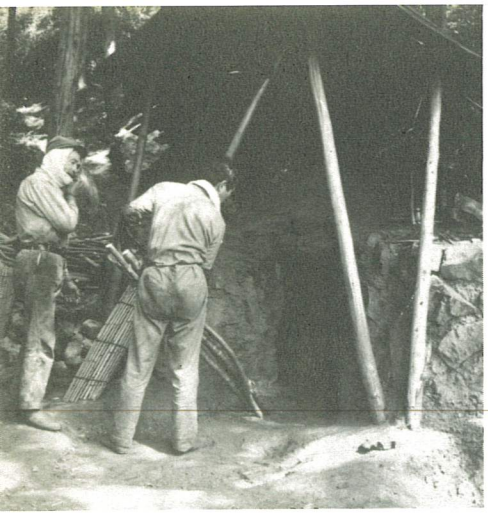


どの手入れをします。三〇年ぐらいたつとりっぱな人工林になります。

大きくなった木を切りたおすと、県道までさく道で運び出します。運び出された木は、トラックで市場などに送ります。

いまでは、林道が山のおくの方まで通っているのでとてもべんりになりました。

木たんは、家てい用のねんりょうとして使われていましたが、今では、プロパンガス・石油などが使われだしたので、炭やきをする人もへりました。



炭小屋

よく育った植林

㈢　店のしごと

1　わたしたちのくらしと買い物

わたしたちが、毎日のくらしにつかっている品物は、ほとんどがいろいろな店で買ったものです。

村内には、農協ストアーなど一〇けんの店があります。

店では、品物をできるだけ多く売るようにくふうしています。店のかん板を人の目につきやすい所に上げたり、品物をみえやすくならべたり、ビラをはったりしています。

村内の店（農きょうストアー）

2　近くの店のはたらき

村内の店では、一けんの店で食料品・文ぼう具・はきものなど、いろいろな品物を売っています。

店で売っている品物は、そのほとんどが、高知市の店や市場から、しいれてきます。

また、道路がよくなり、交通もべんりになったので、よその町から、さかなやくだものなどを自動車につんで、売りにきます。

商行

近くの店にない品物は、村外へはたらきに行った帰りに高知市や鏡村などでも買ってきます。

㈣　工場のしごと

村内には、工場といえるほどのものはありませんが、たけのこのかんづめ工場があります。工場ができたのは、昭和二六年です。今では、六つの工場があります。

たけのこがとれる四月ごろになると、近じょのおかあさんたちは、たけのこ工場ではたらきます。

たけのこは、大きなかまでゆがいてかんづめにします。おもに、高知市や東京・大阪へ送られます。

かんづめ工場

三　わたしたちの村とちがった土地のくらし

(一)　わたしたちの高知県

1　位置

高知県の位置

高知県の北側には四国山地とよばれる高い山々が東西につらなっています。

土佐山村は、高知県の中央部にあり、高知市・南国市・土佐町・鏡村と、となり合っています。

また、県の南側は太平洋が広がっていて、東の室戸岬と西の

足摺岬が土佐湾を取りかこむように、つき出しています。

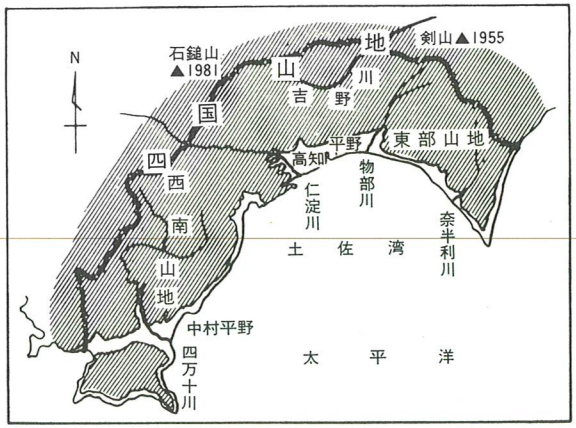
2　面積　およそ七千百平方キロメートル。

3　人口　およそ八三万人。

4　気候　本県の冬は、わりあいあたたかく、農作物をたくさん作ることができるので、農業がさかんです。特に、古くからビニールハウスによる野さい作りは有名で、全国へ出かされています。米の二期作も、南国市周辺で行われています。また、木もよくそだち、中でも、安芸郡の魚梁瀬の杉は、よく知られています。しかし、木を切るだけでは、雨がたくさんふった時にこう水になるので、植林をしています。

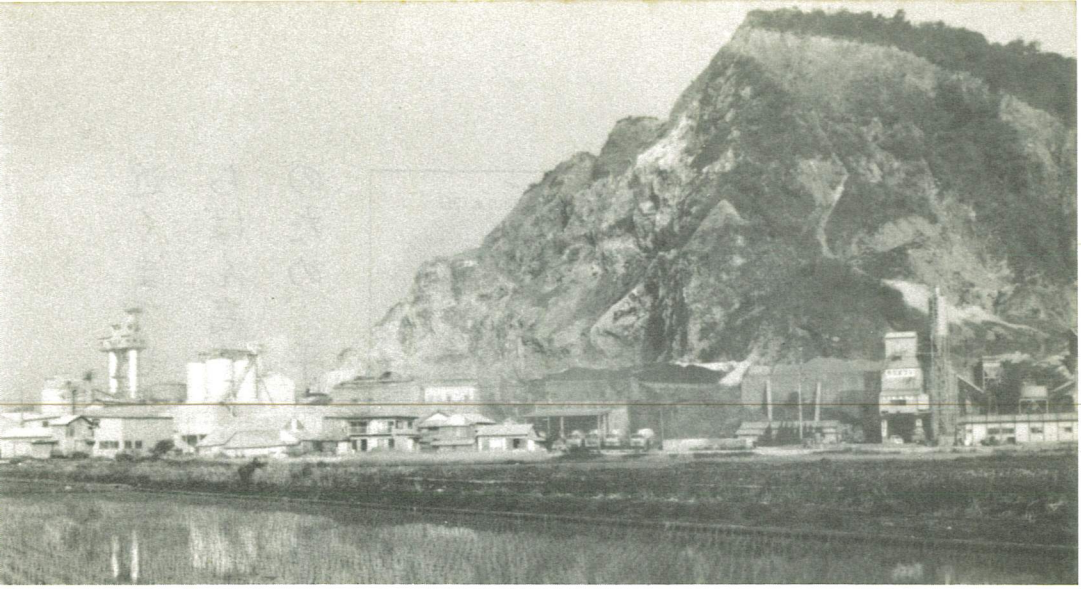
5　土地のようす　本県は、山地がけわしく、また山が海岸

近くまでせまっています。県、北部の四国山地は、西日本でいちばん高く、千メートルをこえる山が百あまりもあります。そのため、平野は、海岸近くに広がっているだけで、山地の面積と比べると、ごくわずかです。



高知県の土地のようす

県内の川は、四国山地から深い谷をつくりながら、土佐湾にそそいでいます。物部川や仁淀川の下流には、高知平野、四万十川の下流には、中村平野があります。四国でいちばん長い川は、吉野川で高知・徳島両県にまたがって流れています。



稲生の石灰山

山地のあちこちでは、質のよい石かい石がほり出されています。仁淀村の鳥形山や南国市の稲生などがよく知られています。

海岸近くには、港がたくさんあります。室戸港や土佐清水港からは、まぐろやかつおを求めて、遠くの海まで、出かけています。また、高知港や須崎港からは、木材・セメント・野さい・魚などの積み出しや大阪などへいきする人々でにぎわいます。

6　人々のくらし

高知県は、せまい平地に人口が集中しています。市は、東から室戸市・安芸市・南国市・高知市・土佐市・須崎市・中村市・土佐清水市・宿毛市があります。なかでも、人口が多いのは高知市です。

高知市は、高知県の中心地にあり、県ちょう・市役所・高知じょうをはじめ、いろいろなたて物がならんでいます。

高知県ちょう・高知じょう

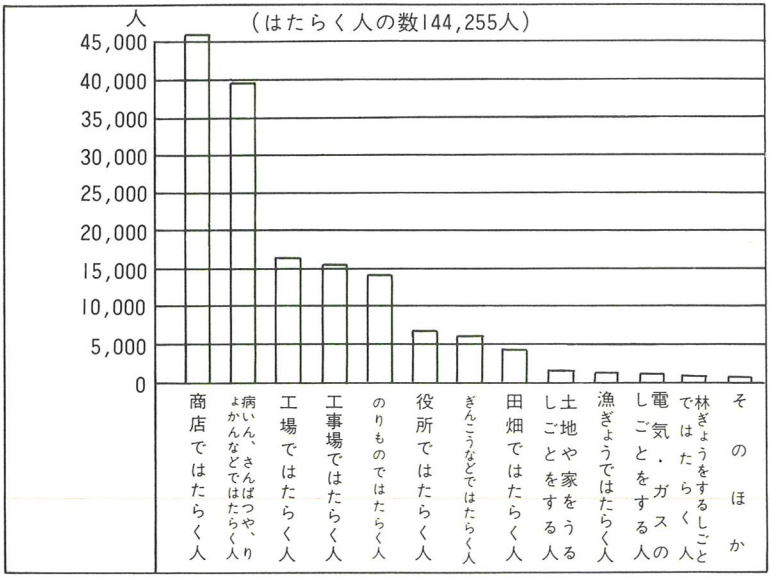
はりまや橋ふきん

はりまや町やおびや町などの通りには、たくさんの店があって、アーケードになっています。また、百か店もあります。

高知市の人々の仕事は、店や病院や旅館などで、はたらく人がいちばん多く、そのつぎは、工場につとめる人で、農家の人はごくわずかです。

高知市で店の多く集まっているところは、はりまや橋ふきん・帯屋町・大橋通りなどです。このあたりは、市の中心部で、いろいろな店が多く集まっていて商店がいになっています。そのため、たくさんの買い物客でにぎわっています。また、店の多くは、飲食店・食料品店・衣料品店などです。

高知市のしごとしらべ（昭和55年国せいちょうさ）



漁船からおろされせりにかけられる魚

中央おろし売り市場は、中の島弘化台の新しいうめ立て地にあります。ここでは、高知市や土佐山村などで売られる魚・野さい・くだ物などが集められ、取り引きされます。

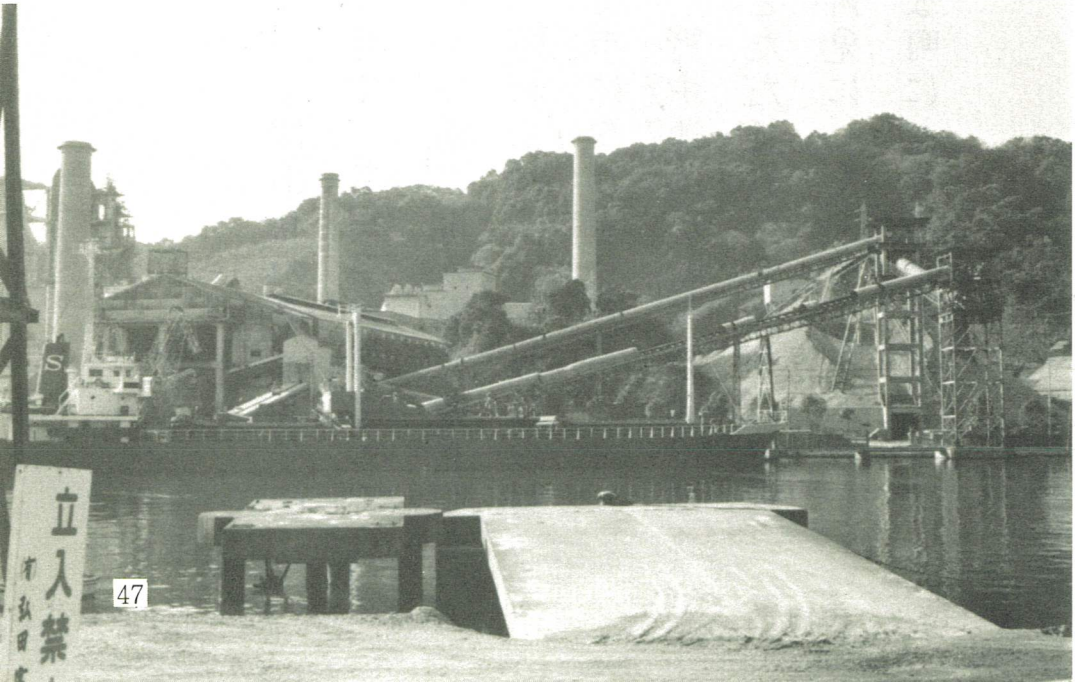
市場では、せり人となか買い人との間で値だんがつけられます。「せり」は、朝五時ごろ始まり、品物がいたまないように手早くします。

7　高知市の工場

高知市には、工場の数がおよそ一〇〇〇あります。その中には、せい紙工場・鉄工所・化学工場・造船所・木材加工所・セメント工場などがあり、ほとんどが荷物の積み出しにべんりな、浦戸湾の近くにあります。

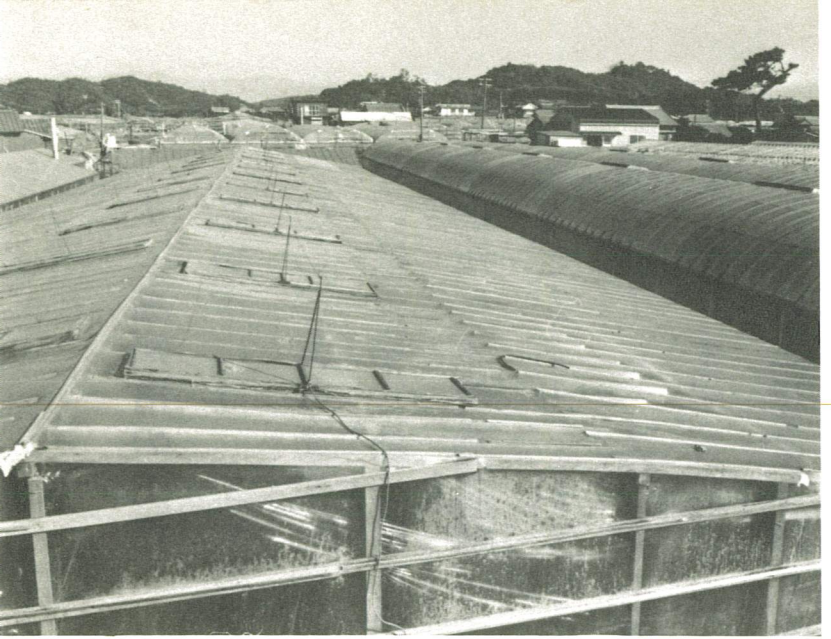
大きい工場は、ほとんどがうめ立て地にあります。多く集まっている所を工場だん地といいます。

日本セメント土佐工場



(二) 平地の多い南国市

1 土地のようす



ビニールハウス（南国市十市）

南国市は、土佐山村の東どなりにある田園の町で、高知平野の中心です。物部川の下流に開かれた後免町を中心に、昭和三四年、まわりの村が集まって市になりました。

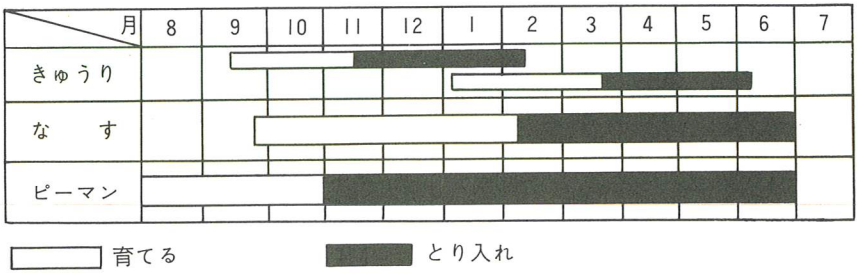
むかし、野中兼山が新田を開くのに、土地をただであたえたり、年貢米や税も御免にしたので、市も開かれる大きな町になりました。

2　農家のようす

米の二期作は、毎年のようにやって来る台風をさけるのに、つごうがよいので、広く行われていました。ところが、人手が足りないことや、ひりょうが多くいるわりには、二回目のしゅうかくが少ないので作る人がへってしまいました。

秋になると、海べにそった十市をはじめ里改田・岡豊・長岡あたりには、ビニルハウスが立ちならび、ピーマン・きゅうり・なすなどを作ります。冬は、加温すること

きゅうり・なす・ピーマンの早作りごよみ



工場ではたらく人（都築紡績）

もあります。

3　工場のようす　南国市は、工業もさかんです。農きぐ工場をはじめ、石かい工場やぼうせき工場など、およそ二〇〇の工場があり、六〇〇〇人あまりの人がはたらいています。

4　交通　南国市は交通がべんりで、いろいろな交通機関がとおっています。また、高速道路もけんせつされています。

高知空港は、東京・名古屋・大阪などへいきする人々でにぎわっています。

四　土佐山村のうつりかわり

(一)　学校のうつりかわり

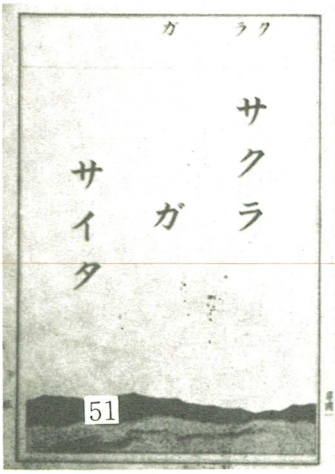
1　土佐山村の学校

むかし、村には西川・桑尾・弘瀬・中切の四小学校がありました。

昭和四一年には、弘瀬小学校と中切小学校がとう合して、土佐山西小学校となりました。昭和五〇年には、西川小学校と桑尾小学校がとう合して、土佐山東小学校になりました。

その後、昭和五四年には、二つの小学校

むかしの教科書



がとう合して、土佐山小学校となりました。

2　小学校のあゆみ

昭和のはじめごろまでの学校は、まどもしょうじで暗く、冬はストーブもありませんでした。このころの勉強は、「よみ・かき・そろばん」といって、読むこと、書くこと、計算することでした。

明治三三年に、学校せい度がかわり、小学校四年生までが、ぎむ教育になりました。

また、明治四〇年には、ぎむ教育が六年間ときめられました。

明治・大正・昭和にかけて、わが国はたび

むかしのそつ業しゃしん

たび戦争をしました。とくに、昭和一六年から、太平洋戦争がはじまり、戦争がはげしくなると、小学生も軍事くんれんをうけるようになり、学校の名まえも国民学校とかわりました。

しかし、戦争にまけると、いろいろなせい度が、すっかりかわりました。

学校のせい度も、昭和二二年に新しくなりました。これが、今の小学校のはじまりです。小学校六年間、中学校三年間が、ぎむ教育となったのもこの年からです。

このころは、小学生の人数も多く、土佐山村全体で、三〇〇人あまりでした。昭和五六年度の村内小・中学校の児童・生徒数は、小学校七七人、中学校三七人、合計一一四人です。

つぎに、それぞれの小学校のうつりかわりを調べましょう。

もとあった学校

西川小学校

明治二〇年　菖蒲・西川・梶谷の小学校がとう合し、西川尋常小学校となった。

（場しょは須和崎）

四二年　校しゃのたてましをした。

昭和一六年　西川国民学校と名まえをかえた。

二二年　西川小学校となった。

三五年　まどをガラス戸にした。

むかしの西川小学校

昭和四三年　そうりつ八〇しゅう年記ねん式てんをした。

五〇年　とう合によりはい校となった。

桑尾小学校

明治一一年　桑高小学校が桑尾につくられた。

二一年　校しゃをたてなおした。桑尾尋常小学校となった。

二二年　桑尾尋常高等小学校となった。

三五年　新しい校しゃがたつまで、部らくの神社で勉強し

むかしの桑尾小学校

た。

昭和　八年　運動場をひろげ、一教室ふやした。

一六年　桑尾国民学校と名まえをかえた。

二二年　桑尾小学校となった。六学級になった。

三四年　新しくたてなおし、運動場もひろげた。

中切小学校

明治一五年　中切に尋常小学校がつくられた。

大正二年　高等科をやめ、中切尋常小学校

むかしの中切小学校

となった。

昭和一六年　中切国民学校と名まえをかえた。

二二年　中切小学校となった。

四一年　とう合により、はい校となった。

弘瀬小学校

明治　八年　弘瀬尋常小学校が弘瀬（奈路）につくられた。

二二年　弘瀬（玉簪）に新しい校しゃをたてた。

四二年　高等科をつくり、弘瀬尋常高等小学校となった。

むかしの弘瀬小学校

大正　二年　高等科をやめ、弘瀬尋常小学校となった。

昭和　三年　新しい校しゃをつくった。

一六年　弘瀬国民学校と名まえをかえた。

二二年　弘瀬小学校となった。

四一年　とうごうにより、はい校となった。

土佐山西小学校

昭和四一年　中切小学校・弘瀬小学校がとうごうしてできた。

きしゅくしゃもできた。（まえの弘瀬小学校）

四三年　校き・校かをつくった。

五一年　きしゅくしゃをとじた。

土佐山西小学校

土佐山東小学校

昭和五〇年　西川小学校と桑尾小学校が、
とう合してできた。
五二年　校歌をつくった。

今の学校

土佐山小学校

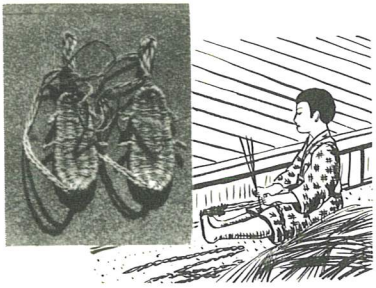
昭和五四年　土佐山東・土佐山西小学校が
とう合してできた。
校き・校歌をつくった。
五六年　新校舎が完成した。
プールができた。

今の土佐山小学校

土佐山東小学校

(二) 村のうつりかわり

1 子どものくらし



ぞうり作り

昭和のはじめのころまでの子どもは、男の子も女の子も着物で、ぞうりをはいて、学校に通いました。冬でも、たび・くつした・手ぶくろは、ほとんどしませんでした。べんとうは、きびめしや麦めしで、もっそうややなぎこおりにつめ、おかずには、じゃこやうめぼしなどを入れました。テレビのない時ですから、いろいろくふうして、外で元気に遊びました。おにごっこ・どんま・まりつきなどをしました。そして、ほとんどの子どもが家の手つだいをしました。

往　還

2　むかしの道

むかしは、往還といわれたはば一メートルぐらいの道が、けわしい山や、まがりくねった川にそって、通っていました。

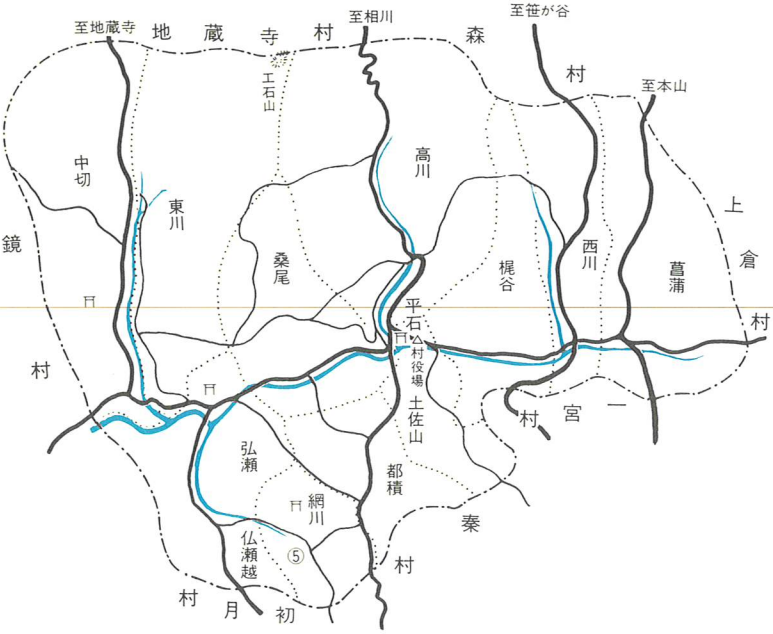
これらの道は、南国市、鏡村、高知市、土佐町につながっていました。でんせつでは、竹林寺を作ったぼうさん（行基）が、奈良の都から、今の大豊町を通り、笹が谷・西川をこして、五台山に行ったといわれています。

人々は、いききに、たいへんくろうしました。そのころは、おもに歩き、ときには牛・馬をりようしていました。こう

ぞや木炭をせにつけた馬が、すずをならしながら、ときには、二十頭ぐらいもつづいて行ったそうです。おじいさんが小さかったころ、平石には、二けんのやど屋がありました。遠くから役場へ来る人、土佐町の方へ牛や馬の売り買いにいく人、薬のぎょう商人など、いろいろな旅人がとまっていました。ここへ昼の食事に行くと、いつもいっぱいでにぎやかだったそうです。

村を南北に通る道が、四つありました。そのうち、森往還とよばれた道は、北の相川から、工石山の近くの樫山峠をこして、高川・平石・桑尾・都積を通り、秦泉寺・

高知の城下町へとつづいていました。

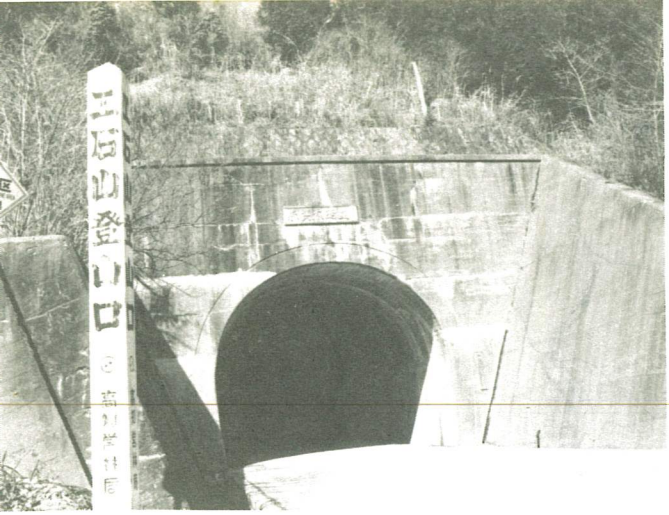


土佐山村のかい道

とちゅうには、てん屋・やど屋などがあって、旅人はそこでひと休みしました。高川橋のところには、やど屋と荷もつの中つぎをかねた紺屋（こんや）という大きな店がありました。

東にある道には、土佐町の笹が谷から、西川・入定（にゅうじょう）・重倉（しげくら）・薊野（あぞの）・高知市へとつながり、おもに、土佐町・大川（おおかわ）・吉野（よしの）の方の人々がり用していました。

また、本山町の人々は、中の川・菖蒲・がに越・細簽・久礼野・高知へと出ていきました。地蔵寺・石原の人々は、東川・中切を通り、網川の仏瀬峠をこえて高知へ出ました。この道は鏡村にも通じていました。これらの道を、かい道といいます。



赤良木トンネル

明治三〇年ごろ、土佐郡道が、高知から平石・高川までついて、人々のいききもべんりになりました。明治四〇年ごろに、高川から相川までのびました。

昭和三八年に赤良木トンネルができると、自動車も通れるようになりました。

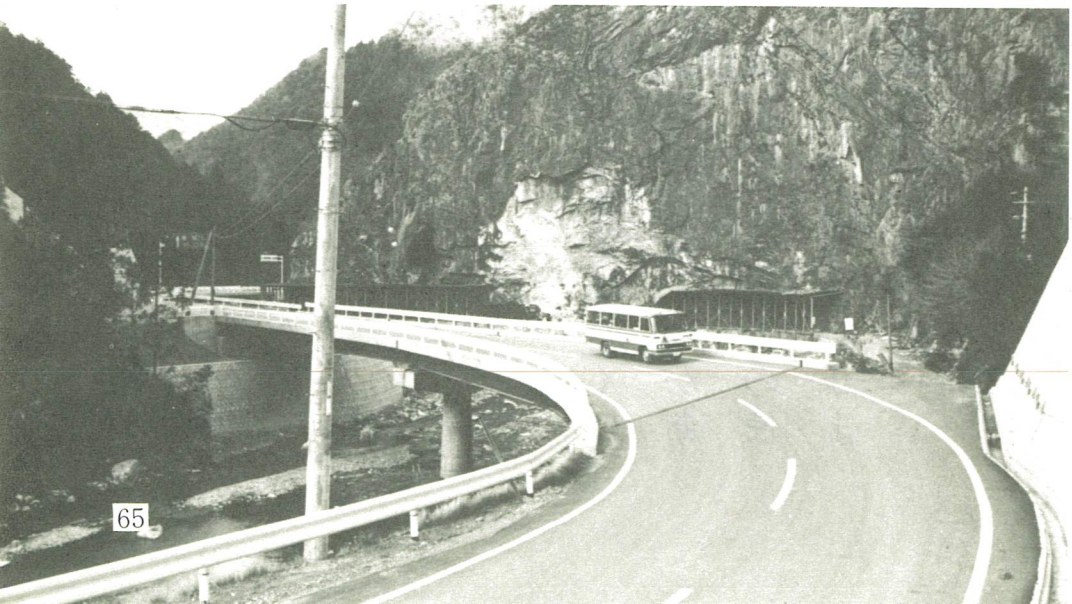
これが、県道・高知―本山線です。

このトンネルは、工石山青少年の家の近くにあります。

村を東西に走る道は、大正三年ごろから長い間かかってつくったもので、郡道・嶺南線といいます。これは、鏡村の川口から平石へきています。とちゅうには、大穴のなんしょがあり、その工事だけでも、一年近く、かかったようです。

しかし、今では、りっぱな橋がかけられました。

大穴と橋



昭和八年には、多金剛から菖蒲に、県道がつき村内の道路がだんだんよくなっていきました。しかし、昭和五一年の一七号台風で、村内の道路はめちゃめちゃになりました。そのため、もとどおりにするのに多くのお金とどりょくがいりました。

㈢　村にのこる古い物

1　文化財・菖浦洞

鏡川の一番上流にあたる菖蒲部らくには、菖蒲洞と呼ばれる石かい洞くつがあります。そこでは、大むかしの人々の使った土器のかけらがたくさん見つかりました。これは、弥生時代のものです。

土器のかけら

2　秋祭りの行事

秋祭りは、部らくの氏神さまでお祭りをした後、家々では、人々と酒をくみかわします。この行事を土佐では、神事（しんじ）と呼んでいます。むかし、人々の楽しみが少なかったころは、一年中でいちばん村中がにぎわいました。

弘瀬の仁井田神社

弘瀬の氏神さまの行事

前もって、仁井田（にいだ）神社から旧（きゅう）弘瀬小学校の校庭のすみにあるお旅所（たびどころ）まで、しめなわが両がわにはりめぐらされます。

お宮のお祭りが始まると「おなばれ」が出ます。大夫を先頭に、着かざった行列のことです。お旅所では、児童・生徒・青年だんで棒使いが行われます。太刀踊のように、かけ声は、「エッヤッホウ」・「参る参る」と呼びかけます。

高川神社

高川部らくの秋神事

大夫が神社の戸を開き、おいのりをすませると、やがて当頭からお神酒がまわされます。八人の当人のせわで、成年男子の前にもった木じゃわんと木の葉にもった少量のやき味そが、白木のぜんにだされます。

そして、「膳部が出ましたときにおあがりください。」というあいさつがあると、一同があらそうようにわざと早く飯をかき食い、その間、一同は「湯々」・「茶々」・「味そ」・「飯」などと呼んで、人々の笑いざわめく中に食べ終わります。

弘瀬神社のおなばれ

高川神社の早飯食い

五　健康でゆたかなくらし

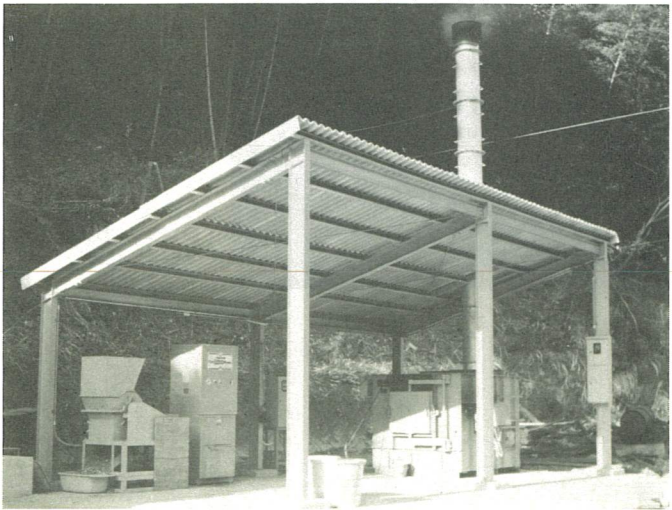
(一)　くらしとごみ

ごみやしにょうのしまつをすることは、むかしからたいへん苦ろうな仕事です。

平石部落の周辺のしにょうは、高知市のえい生組合にたのんで、月一回くみとってもらっています。しかし、ほとんどの家は、畑などのひ料として利用しています。

ごみやちりは、今までそれぞれの家でもやしたり、もえない物は、山にすてたり、あなをほってそこにうめるなどしていまし

ちり焼きゃく場（平石）



た。でも最近では、えい生面や自然を守ることを考え、「山などにすてるのはやめよう。」という声が強くなってきました。

役場では、しょう来のことを考えて、村内のちりやごみをしまつできるように昭和五六年、平石に新しくごみ焼きゃく場をつくりました。

ごみゼロ運動

わたしたちの土佐山村は、自然にめぐまれたとても美しい村です。ところが、最近では、工石山へ行く人たちが多くなり、車からごみや空かんを投げすてたりする人がいます。そこで、役場の人たちや中学生が協力して、村

ちりかご

内のところどころにちりかごをそなえました。土佐山小学校でも、昭和五五年からごみゼロ運動を始めました。また、ちりやごみをなくそうと村全体で取り組んでいます。

㈡　電気と飲料水

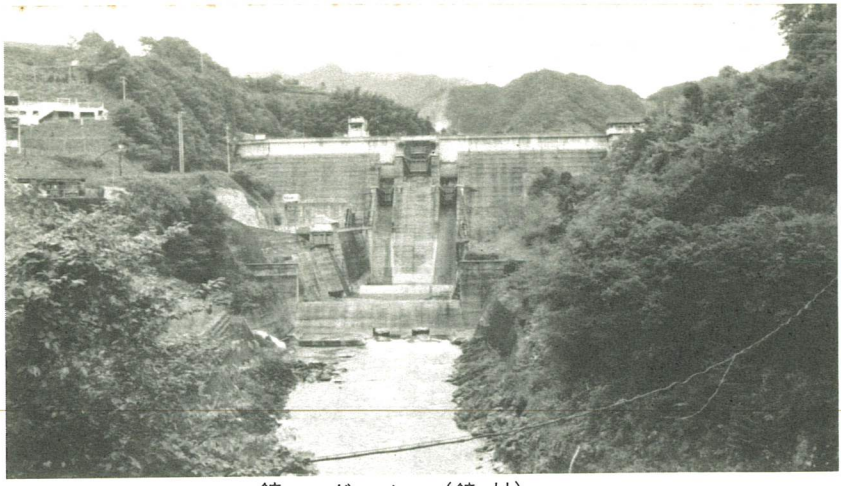
今、私たちの身の回りには、テレビ、ラジオ、せんたく機、冷ぞう庫など、電気せい品がたくさんあります。電気せい品がたくさんあると便利な生活ができるため、電気の使用量が年々多くなってきました。

昭和四三年三月、鏡村に鏡ダムができ、五三年三月には、下中切に天神発電所もで

家庭用・公共施設電気の使用量（土佐山村）

四国電力高知営業所しらべ

	電灯口数	使用量（単位：キロワットアワー）
43年	508	305,000
50年	535	594,000
55年	573	751,000

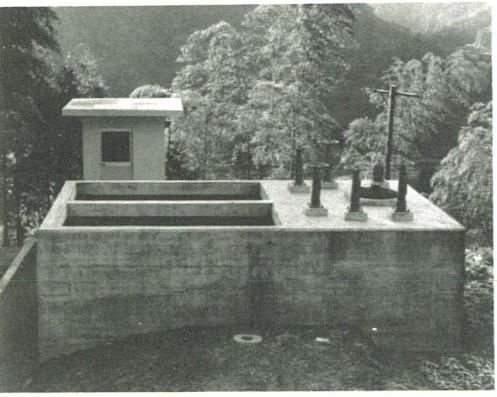


鏡　ダ　ム　（鏡村）

きました。

今までいずみや谷川の水にたよっていた人たちも昭和三五年、平石部落に初めてちょ水池ができ、かんい水道が使えるようになりました。続いて昭和五三年には弘瀬部落にもでき、きれいな水が自由に使えるようになりました。ほかの部落も少しずつせいびされ、くらしもずいぶんと健康でゆたかになってきました。

貯水池（弘瀬）



六　安全を守る

(一)　火事をふせぐ

現在、土佐山村の消防だんは、東分だん（平石）と西分だん（弘瀬）があり、四三名のだん員がいます。

土佐山村の消ぼうだんは、昭和の初めから活動しています。だん員の人たちは、ふだんは、それぞれの仕事をしていますが、火事のサイレンが鳴ると、火事場にかけつけ、火を消します。まえは小がた消ぼうポン

消防団のくん練

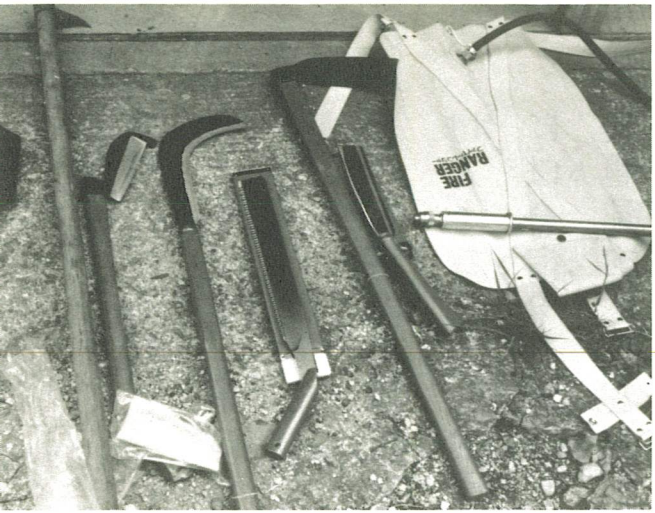
プだけで活動していましたが、昭和四七年には、消ぼう自動車（ポンプ車）が一台そなえられました。そして、定期的に消火のくん練や道具のけんさなどをします。このほか、夏には合宿くん練をしたり、冬には、夜間見回りなどをして、いざという時にそなえています。

村内は、山が多いので、山火事の心配があります。山火事では、消ぼう自動車がなかなか入っていけませ

消防自動車

ん。そのため、背(せ)おい式の消火器が使われます。

家がちらばっているため、火事場に行くまでたいへん時間がかかります。消火に使う水は、谷川をせきとめて利用しています。でも家が山の上の方になると、谷川までホースがとどかない場合があります。



山火事を消す道具

消ぼうだんでは、「火事を出す前に、まず予ぼう」を目標にして、村民によびかけています。また、家に消火器を置くように働きかけたり、村内のところどころにぼう火水そうをつくったりして、火事のひ害を少なくしようとつとめていま

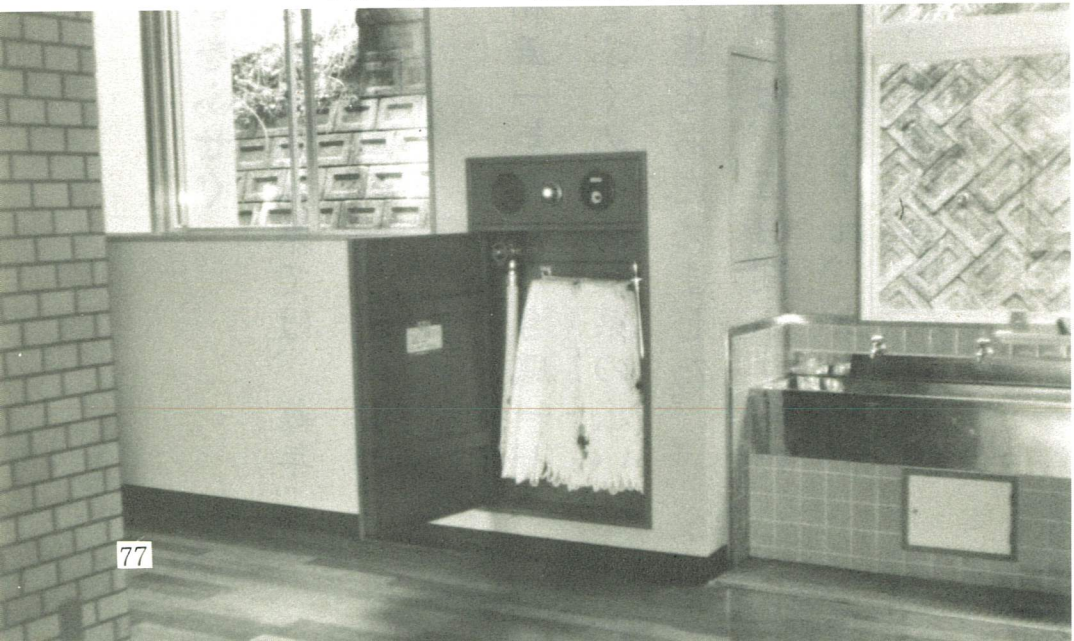
す。

こうした努力により、昭和五一年一一月から火さいがおきていません。

消ぼうだんの人たちは、火事のほかにも、台風・大水・山くずれ・地しんの時など、人びとの命やざい産を守るために、力を合わせています。

また、こうした仕事をすすめていくために、まわりの高知市・南国市土佐町・鏡村などといつも連らくをとり、助け合うしくみになっていま

学校の消化しせつ（土佐山小学校）



網川橋（あみ）

す。

(二) 水がいをふせぐ

台風銀ざとよばれる高知県では、毎年のようにいくつかの台風の通り道になっています。

その中で、昭和五一年九月の台風一七号は、土佐山村をふくめ、高知県の広い地いきに大きなひ害をあたえました。

とくに土佐山村では、五日間ふり続いたごう雨のために山がくずれ、土や石がはげしく流れ出し、道路や田畑がくずれ

落ち、家や橋がおしつぶされてしまいました。小学校体育館の南側もくずれ、もう少しで体育館もいっしょにひ害をうけるところでした。

このように、大さい害が心配されるときは、すぐに対さく本部が役場につくられ、どうするかを話し合います。

この台風一七号の時にも対さく本部がつくられ、各地のひ害のようすが知らされていましたが、まもなく

土佐山小学校体育館

電話も不通となってしまい、まわりの市町村からこ立したじょうたいになってしまいました。

でも、地元の消ぼうだんや、村民全体の協力で、ひ害を受けた人々を助け、安全な場所にひなんさせ、早く安心できるように力をつくしました。そのおかげで村民全員がぶ事でした。

そして、県や国におうえんをたのんで、食料や衣服を送ってもらいま

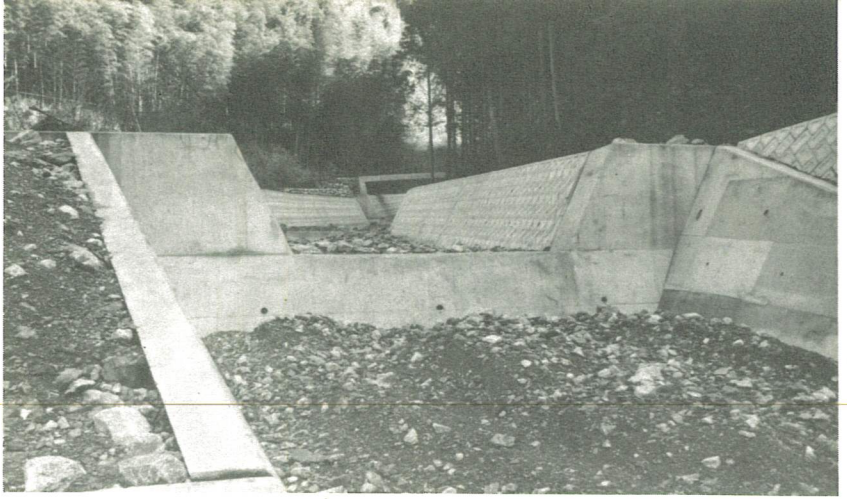
弘瀬ふきん

おう急作業（梶谷ふきん）

した。

ひ害を受けたところを直すのには、県の土木関係の人たちがたくさんおうえんに来て、おう急作業を手伝ってくれました。道の上のくずれた土をのけたり、川ぞいには土のうを積んだりしました。

土佐山村は、けいしゃ地や谷川が多く、また雨量も多いので、大雨がふると大きなひ害が出ます。それでふだんからさい害をふせぐことに気をつけなければなりません。



復旧した鏡川支流（古味ふきん）

役場は、毎年きけんな所の点けんをしています。水がいをふせぐために、重倉川・高川川・網川川・西川川にさぼうていをつくったり、保安林をもうけたりします。

また、村民がきけんなじょうたいになったとき、みんなが安全にひなんできるよう、それぞれの地区にひなん場所が決められています。

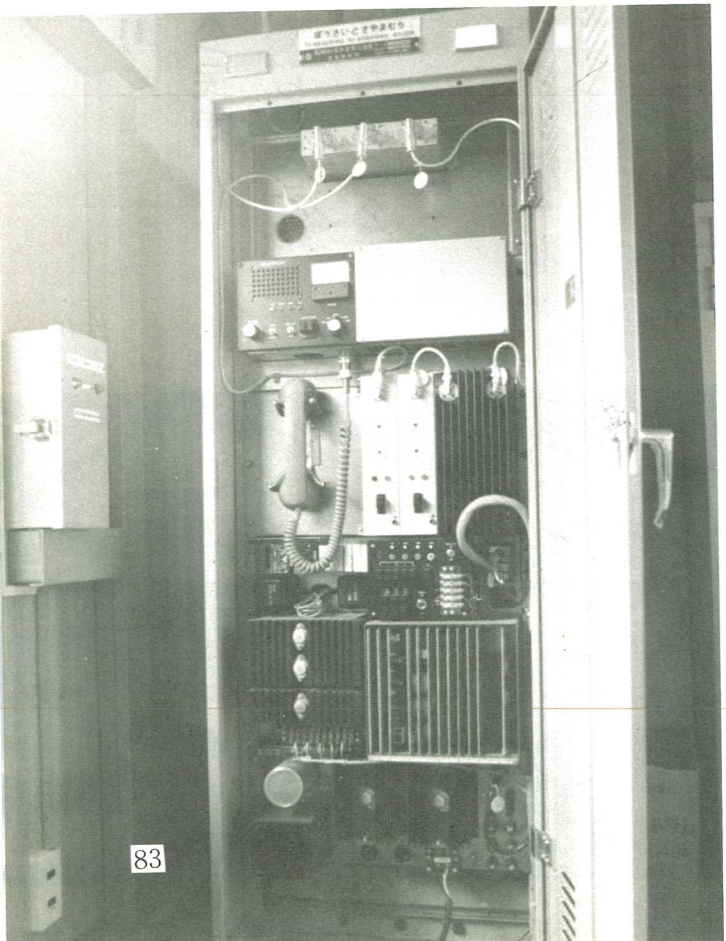
電話も道ろも不通になったとき、急いで連絡をとるためにはむ線機が必要です。

村はこのけい験から、役場とそれぞれの

地区の家（二二戸）に、ぼうさいむ線機や農村じょうほう連らくしせつ（公ほうむ線）をおいています。また、い動む線車もおいて、さい害にそなえています。

い動む線車

ぼうさいむ線機



七　住みよい村づくり

㈠　わたしたちの公民館

公民館は、村の人々のくらしをよくし合い、村の文化を高めあうための公共のしせつです。

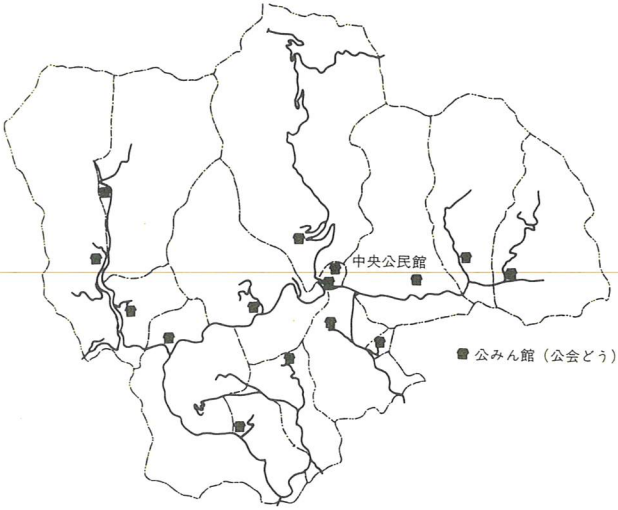
今の公民館は、昭和三六年に建てられました。

一年間（昭和五五年度）に二八〇回も集まって、勉強や楽しみの会をしています。また、公民館には、館長さん・主事さんがいて会の世話をしています。

むかしは、部落の人々が集まって、くらしや祭りのことを相（そう）

中央公民館（平石）

公民館（分館）地図



談することを「寄り」といいました。寄りには、お宮や会場などを使っていました。

村に公民館ができると、公民館活動を部落のすみずみまで広めようと、会場を部落公民館や部落公会堂と名づけました。そして、各部落に分館長さんという世話係もおきました。

各部落では、分館長さんを中心に、自分たちで計画をたて、よりよいくらしをするための勉強やたのしみの会を

しています。

(二) 工石山青少年の家

工石山（一一七六メートル）は、県内の人々が、自然に親しみながら休養できる場所として、昭和四二年に「自然休養林」として指定されました。

そして、昭和四四年には、「身も心もたくましい青少年を育てよう」という県の方しんで、県立工石山青少年の家（木造）が建てられました。

工石山青少年の家は、工石山の美しいけしきにめぐまれてい

ることや高知市から近いので、利用する人が年々ふえてきました。

県立工石山青少年の家

そこで、県では、もっと利用しやすくしようと、昭和五〇年に今の工石山青少年の家を建てました。

工石山青少年の家に来た人たちは、勉強やレクリェーションなどをしています。

工石山青少年の家を利用した人は、一年間（昭和五五年度）に約一万人もあり、遠くは熊本県や岡山県などからも来ているそうです。

㈢　村民の願いと公共しせつ

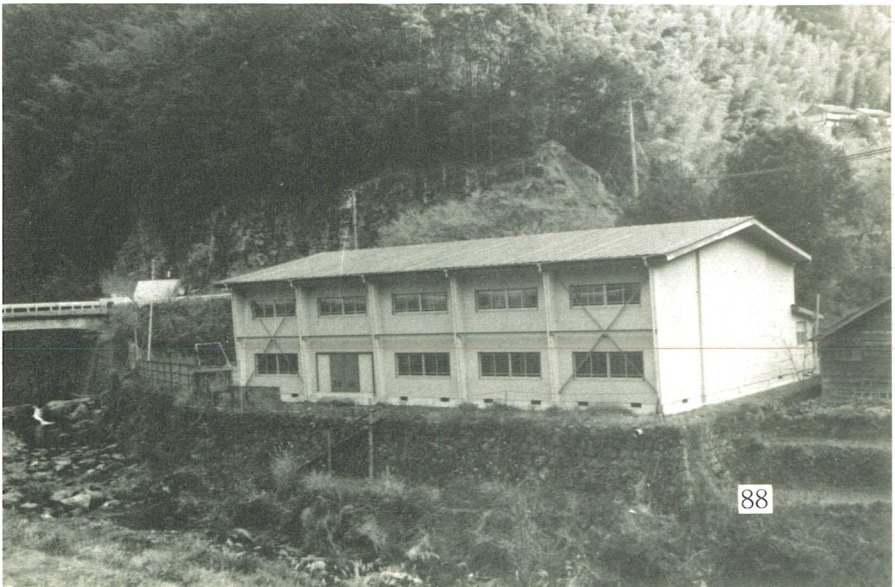
わたしたちの村を住みよい村にするために、どんな公共しせつがあり、どんな願いがあるでしょう。

公共しせつには、学校・幼稚園・公民館・西川体育館・工石山青少年の家などがあります。

公民館が古くなったので、もっと使いやすい新しい公民館を建てる相談もしています。

また、総合グランドをつくってほしいという願いもあります。

西川体育館



人々のさまざまな願いをかなえるためには、村は計画をたてぎ会にはかり、県や国の助けも受けて実げんさせています。

願いの中には、たくさんのお金のかかることもあり、一度に全部の願いをかなえることはできません。とくに大事なこと、急ぐ必要のあることから順に実げんさせています。

土佐山幼稚園

土佐山中学校

八　郷土を開いた人々

(一)　昔の人々の開発

1　新しい考えをもった人々

今から一〇〇年あまり前日本には、明治い新という、とても大きなできごとがありました。武士の世の中がほろび、みんなの人が同じねうちをもった世の中になったのです。けれども、人々の考え方は、そうかんたんにはかわりませんでした。

高知市では、明治七年に立志社というグループができました。板垣退助という人が中心となってつくったもので、「すべての

立志社のひ

人の自由な意見をとりいれて、国の政治をすすめよう」という考え方でした。

この考え方は、日本中に広まりました。西川部落の青年たちもこの考え方にさんせいしました。そして、山嶽社をつくりました。新しい国づくりのことを研究しようとするグループです。

和田千秋・高橋簡吉（初代村長）・長野源吉（三代村長）たちがその中心でした。

明治一五年になって、西川のおくの桧山に、県内から二〇〇〇人ほどの人々が集まりました。

山嶽倶楽部の旗

これは、自分たちの願いを聞いてもらおうとして、国や県にむかって、その力をしめしたものです。

そのころとしては、とても大きなできごとでしたので、新聞などにも書きたてられました。桧山の巻狩といわれているのは、このことです。

このように、青年たちは、たがいに勉強し、考えを深めていったのです。

2　和田嘉八　今から、およそ一〇〇年ほどむかしのことです。桑尾部落に、和田嘉八という人がいました。人々がくろうして、山道を行き来するのを見て、「せめて車りき（荷車）ぐらいが通れる道をつくろう。」と心にきめ、道をつくりはじめま

和田嘉八のひ

した。

工事は、明治一五年から明治二八年までかかりました。嘉八さんは、自分のざいさんをすっかり使いきって、北の樫山峠から南の秦泉寺村（今の高知市）までつけました。

村人たちは、大へんよろこんで、その道に「嘉助道」という名まえをつけました。現在、平石にその記念ひがたっています。

3　高橋修　村の公民館の前に、高橋修という人の記念ひがあります。

修さんは、弘瀬の人です。明治三〇年に村長さんにえらばれ

高橋　修のひ

た時、村有林をたくさんつくって村のざいさんをゆたかにしようと思いたちました。そのため自分の山を村へ寄付したり、村にある国の山を買いとったりしました。

そうして、それらの山に、つぎつぎと植林をしていきました。その村有林のおかげで、昭和三十年代に、この木を使ったり、売ったりして、村の仕事をす

弘瀬公会堂

すめることができました。前の東小学校・中学校や村役場、今の弘瀬公会堂などはこうしてできました。

4　野中兼山の開発

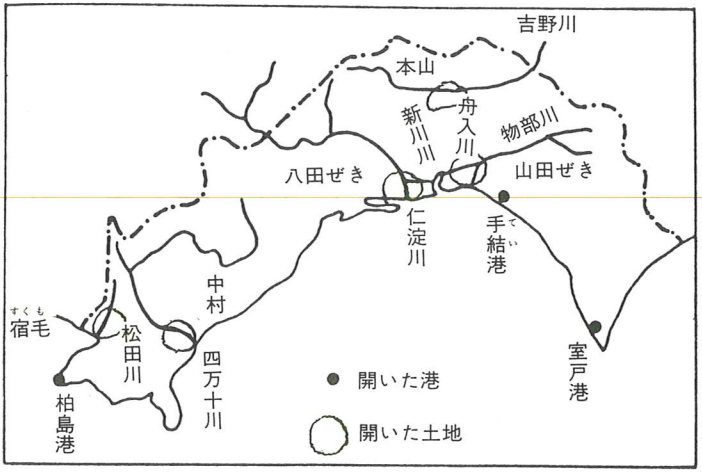
今から三五〇年あまり前の江戸時代には、高知県は土佐藩とよばれ、山内氏が藩主として、土佐の国をおさめていました。そのころは、武士の世の中です。藩の多くの武士がくらしていくには、ひ用もたくさんいりますが、そのひ用は、農民のおさめる年ぐ米でまかなわれていました。

野中兼山

そこで、藩では、年ぐ米をたくさんとるために、田畑をふやそうとして、荒れ地を開発する

ことに力を入れました。とくに、二代藩主山内忠義(ただよし)につかえた野中兼山は、たくさんの人を使って、およそ三〇年の間に、高知県全体で大きな開発の仕事を行いました。

野中兼山の開発



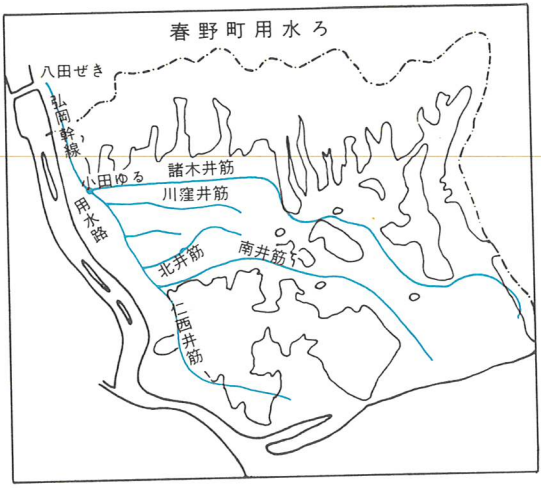
兼山によるおもな仕事は、てい防(ぼう)をきずき、川をせきとめて用水路をひらき、荒れ地を水田(すいでん)にかえることや、新しく港を開いたことです。

兼山によって新しく開かれた土地（新田）は、三八〇〇ヘク

タールにもなり、そこからとれる米は、およそ三万石にもなったということです。

物部川の「山田ぜき」・仁淀川の「八田ぜき」・「手結の港」は、野中兼山の開発による有名なせきや港です。

弘岡用水　そのころ、仁淀川の下流の春野町では、山のふもとの谷川のあたりに水田があって、米作りがわずかに行われていましたが、そのほかは、荒れ地や畑になっていました。日照りがつづくときは水にこまっていました。また、仁淀川は毎年



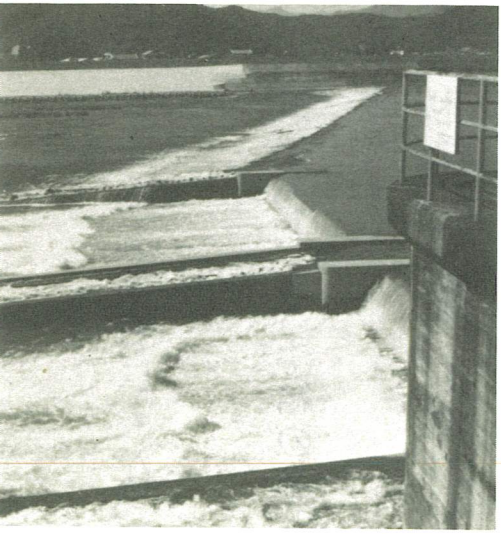
のようにこう水をおこし、人々を苦しめていました。

兼山は、この荒れ地を開いて水田をつくるために、仁淀川の水を引こうと考えました。しかし、仁淀川の水の高さが、春野町の土地より低いため、水のとり入れ口は、ずっと上流の伊野（いの）町「八田」にきめ、そこにせきをつくって、仁淀川の水をせきとめ、用水路によって春野町へ引こうと考えました。

八田ぜきの工事　八田ぜきは、長さおよそ四一五メートル、はば二〇メートルもある大きなせきです。

このせきは、慶安元年（けいあんがんねん）（一六四

八田ぜき

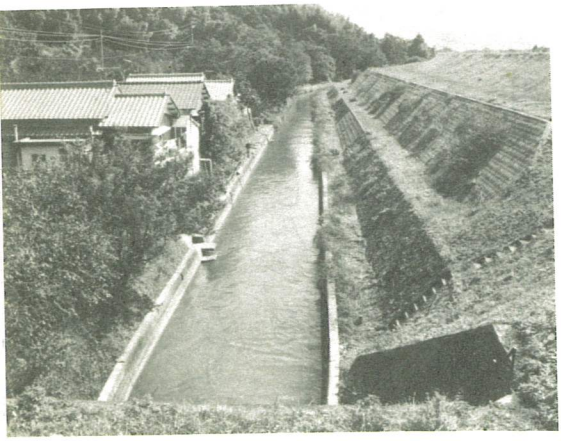


八）に工事をはじめ、五年かかってしあげたものです。今のように、すすんだ土木機械のない時代でしたので、すべて人力でやりました。また、コンクリートもなかったので、せきをつくる材料はすべて木材と石でした。

大きい材木をきって、「四つ枠」をつくり、その中に石やくり石をいれて、岸の方からだんだんせきをつくっていったのです。

また、水面に張ったつなの流され方から、流れの強さを知りせきを川しもにはり出すやり方

弘岡用水



も取りいれました。

しかし、このせきも、だんだんいたみがひどくなり、昭和六年に、コンクリートづくりにつくりかえました。そして、いまの「八田ぜき」は、昭和四〇年にふたたびなおしたものです。

用水路の工事　こうして、八田ぜきができ、仁淀川の水がせきとめられますと、その水を引くため用水路づくりが始まりました。用水路は、水がうまく流れるために、土地の高さをはからねばなりません。今のように測量機械のない時代ですから、夜、竹のさおの一定の高さにちょうちんをつるして、それをならべて、土地の高さをはかったと伝えられています。また、山があると、その山を切り開いて水路をつくらねばなりません。

工事のようす

ちょうちんを利用してのそく量

これを切抜（きりぬき）といっています。春野町と伊野町のさかいにある行当（ゆきとう）の切抜は兼山のいちばん苦心したところだといわれています。今のように、ダイナマイトのないころですから、のみとつちでこつこつと岩をくだかなくてはなりません。

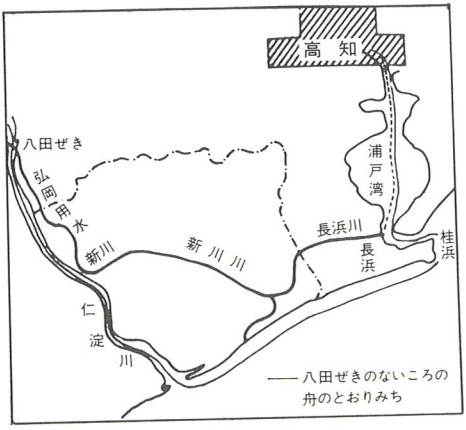
行当の切抜では岩がかたくてこまっていたとき、ある人が、いもじ（さといものくきをかわかしたもの）をかたい岩の上でやくと、岩がくだきやすくなるというのをきいて、農家へいもじを出すよう命令したとも伝え

行当の切抜きと記念ひ

られています。今はこの切抜のあとはうめられて、トンネルになっていますが、いまものこる深いがけに、そのころの苦労のあとがしのばれます。

また、ほりとった用水路の底を、水がもれないように、ねん土や赤土でつき固めることも、大きな工事で、「千本突」といって、多くの人が棒をもって、用水路の底をつき固めたといわれます。

こうしてできた用水路を、弘岡用水とよんでいます。弘岡用水は、春野町内で、諸木井筋、川窪井筋など、いくつもの井筋



（弘岡井筋ともいう）に分れて、春野町全体に水を送っています。

この用水路によって、それまで荒れ地だった土地も開かれ、新しい水田からは、たくさんの米がとれるようになりました。

さらには、仁淀川と浦戸湾がつながり人や物が運べるようになりました。井筋ぞいにできた新川の町には、荷物をつんだ川舟が集まり、船頭（せんどう）やどもできてにぎわったそうです。

野中兼山の一生

（西暦）	（したことなど）
一六一五	播磨（はりま）国に生まれる
一六一八	土佐にうつる
一六三八	本山用水路をつくる
一六三九	山田中井川をつくる
一六四五	山田上井川をつくる
一六四八	弘岡井筋工事かいし
一六五一	津呂港改修はじめる
一六五二	弘岡井筋完成さす
一六五五	父養寺井川をつくる
一六五六	高岡井筋工事進める
一六五九	鎌田井筋をけんせつ
一六六一	鎌田ぜきをつくる
一六六三	津呂港をつくりあげる
（一六六四）	兼山なくなる（四八才）（野市下井川できる）

田ぜき八

（山田ぜき）

(二) 浦戸湾のうめたて

1、うめたてられた浦戸湾

フェリーで浦戸大橋をくぐって湾内に入ると、左手に緑の低い山々が見えます。右手は、造船所・木材団地・石かい石の積み出し場と続きます。さらに進むと、石油タンクがならび、やがて中央おろし売り市場の建物が見え、がんぺきの向うに市街地が広がります。

このあたりは、高知県の産業にとってはたいせつなところで、一日じゅう、船が出入りし、自動車が行きかい、活気にあふれています。

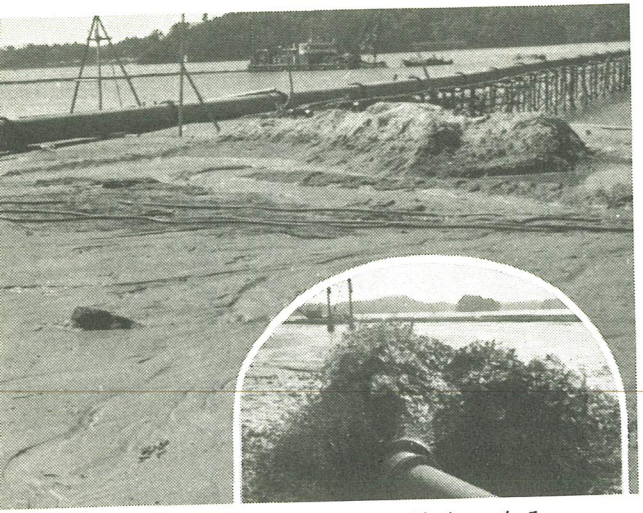
むかしの浦戸湾は、海が広く、島もあり景色の美しいのどかなところでした。今はうめたてられた土地に、会社や工場がたちならびにぎやかなところとなりました。

湾のうめたて　高知県の産業をさかんにするため工場用地をつくり、また、大きな船が自由に出入りできるりっぱな高知港にしようと、一〇年計画で、昭和三六年から工事をはじめました。

工事は海底のしゅんせつと海岸のうめたてを、同時に行うやり方でした。大きな船が通れるように、しゅんせつ船で、海底の

石油タンク

土砂をすくいとったり、サンドポンプですい上げたりしました。そして、その土砂を利用してうめたて地をつくりました。そのほか、山をけずって道路を広げ、けずりとった土もうめたてに使いました。このようにして一三六万平方メートルの広い土地ができました。



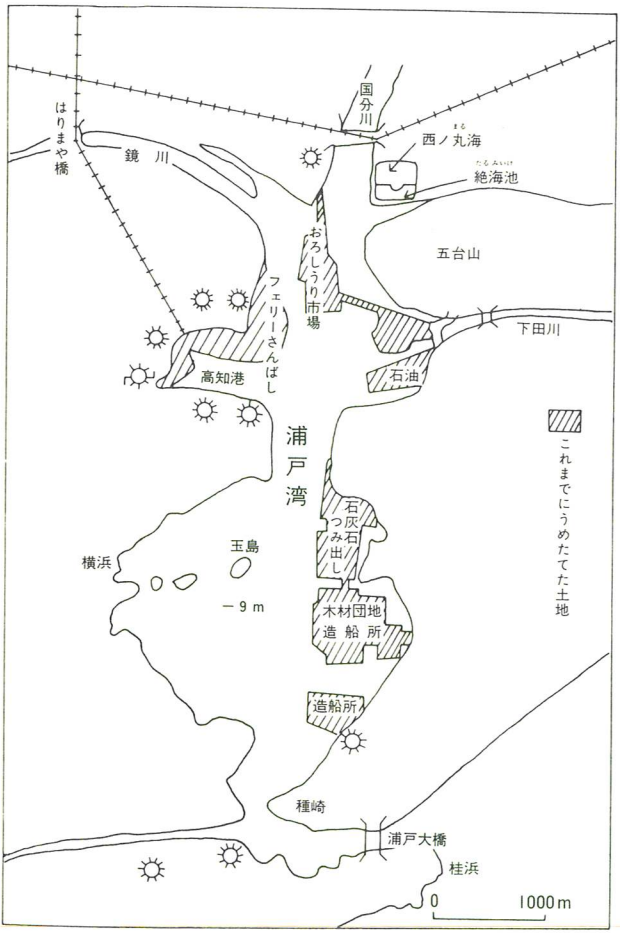
サンドポンプでうめたて地をつくる

そして、ここに造船所・木材団地・石かい石の積み出し場・石油基地・中央おろし売り市場などの大きな建物やしせつなどがつぎつぎとつくられました。

しかし、広い海面をうめたてたため、湾に流れこむ川のふきんでは、水はけが悪く

なったといわれています。また、高潮（たかしお）の心配がふえたので、てい防を高くしたところもあります。そこで、これ以上のうめたてはいけないということになり工事を中止しました。

浦戸湾のうめたてとその利用

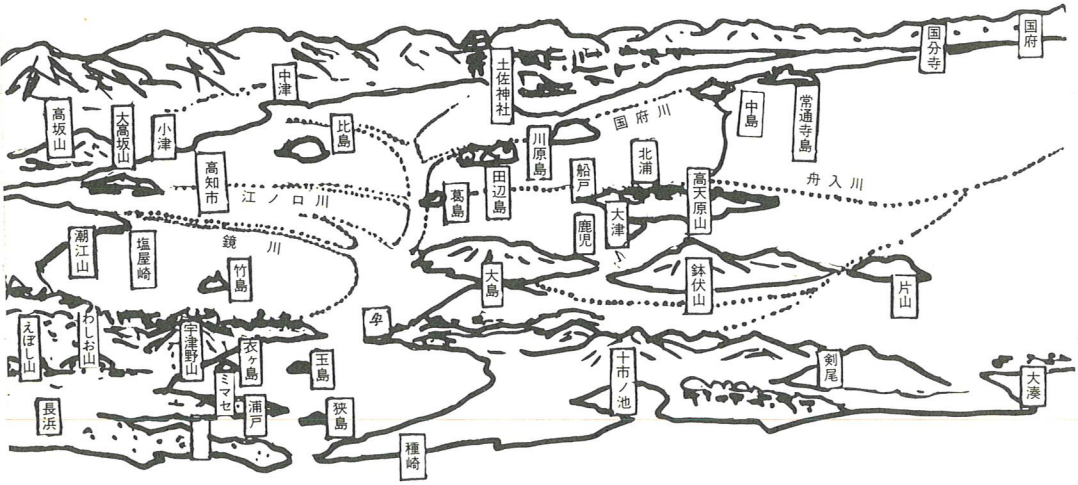


2　低い土地

高知市の東の方にある五台山は、むかしは大島とよばれ、浦戸湾に浮かぶ島でした。しかし、国分川や下田川などが、こう水のたびに土砂を運んできて、いつのまにか島のまわりに低い土地ができました。そして、今のような陸続きの地形になったようです。

そのため、五台山の南の下

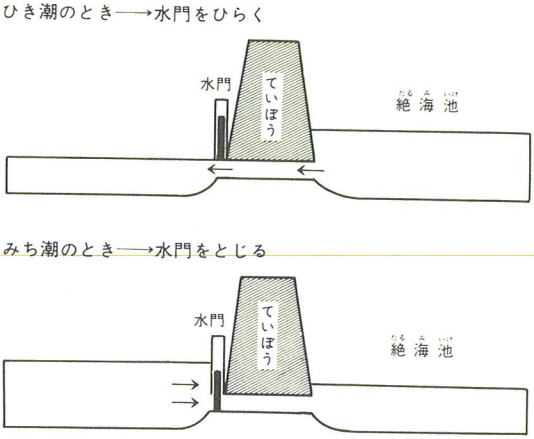
1000年昔の高知付近と今のようす



田川ぞいや北の高須あたりは土地が低く、高潮のときは海水が入ったり、大雨のときは水につかったりしました。

しかし、土地の人々はいろいろくふうして米作りにはげんできました。

てい防・水門・池



土地の人々は、田畑を水害からまもるため、てい防と水門と池をつくりました。

まず海べの方にてい防をきずき、水門をつくりました。そして、てい防の内がわに絶海池と西の丸池をつくりました。

満ち潮のときは、川の水がぎゃく流して海水が流れこむので水門をとじます。

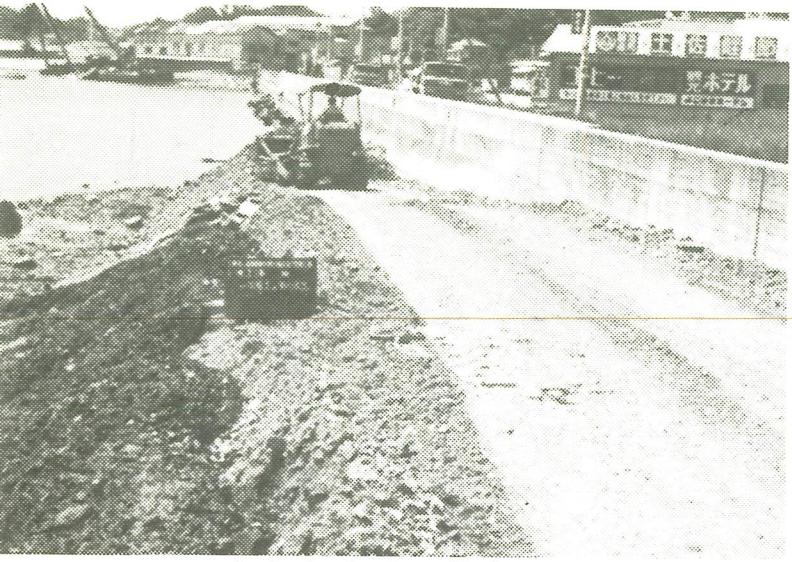
水門がしまっている間、田の水は池に流れこみます。やがて、ひき潮になると水門がひらいて、池の水は海の方に流れます。

こうして、低い土地に田や畑をつくり、米や野さいがつくれるようになりました。しかし、こう水になると水びたしになるので、後に排水ポンプをつけました。

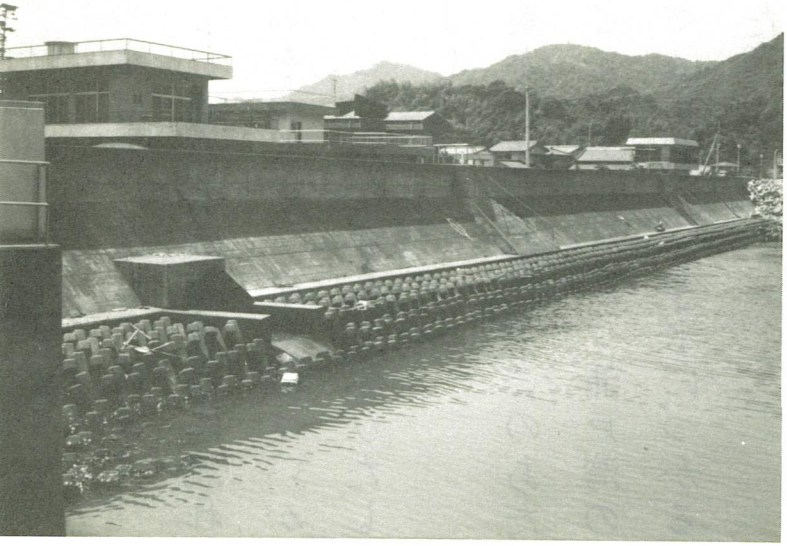
高潮の心配　昭和二一年の南海大地しんで、このあたりの土地は、五〇センチメートルほどしずみました。浦戸湾のうめたてがすすむにつれ、土地の人々は高潮のとき水につかるのではないかと心配になってきました。

そこで、てい防をじょうぶにしたり、コンクリートのかべを高くしたりしました。そして、はい水所を新しくし、力のある

ポンプをそなえつけました。しかし、心配がなくなったわけではありません。



むかしのていぼう



今のていぼう